館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 54 集

館林市内遺跡発掘調査報告書

－平成 27・28 年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査－

笹原遺跡　（平27地点）
下遺跡　（平27地点）
咄戸沼遺跡　（平27地点）
北小袋遺跡　（平28Ａ地点）
萩原遺跡　（平28地点）
法正谷遺跡　（平28地点）
高根古墳群　（平28地点）
八方遺跡　（平28地点）
大原道東遺跡　（平28地点）
中山東遺跡　（平28地点）
当郷遺跡　（平28地点）
北小袋遺跡　（平28Ｂ地点）

２０１６
館林市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成 27・28 年度に国宝重要文化財等保存整備事業費補助金、群馬県文化財保存事業費補助金を受けて実施した館林市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき以下のとおりである。地点名は、平成 27 年度の調査地点は「平 27 地点」、平成 28 年度の調査地点は「平 28 地点」とする。
笹原遺跡　　下遺跡　　咄戸沼遺跡　　北小袋遺跡　　萩原遺跡　　法正谷遺跡
高根古墳群　　八方遺跡　　大原道東遺跡　　中山東遺跡　　当郷遺跡
3．調査組織は次のとおりである。

調査主体者	館林市教育委員会	
担　当　課	文化振興課文化財係	
調査組織	教育長	吉間　常明
	教育次長	坂本　敏広
	文化振興課長	岡屋　英治
	文化財係長	荒川　博一
	係長代理	阿部　弥生
	主任	奈良　純一（副担当）
	主任	田沼　美樹
	主事	宮田　圭祐（担当）
	主事補	小林　松嗣

4．調査作業員・整理作業員（50 音順敬称略）
久保田　憲司　　小島　鉄男　　阪口　丈夫　　杉田　和実　　寺嶋　美雪　　西谷　義信
原田　和沙　　久田　　進　　前田　清美　　三橋　瑞江
5．出土遺物、調査記録および資料は、館林市教育委員会で保管している。
6．本書の編集・執筆は、宮田が中心となり行った。
7．遺物の実測・観察表およびその他の図版作成は、宮田・原田・前田・三橋で行い、一部（有）毛野考古学研究所に委託した。
8．調査の実施および本書刊行にあたり、下記の諸氏諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる次第である。（順不同、敬称略）
地権者各位　　川島　正一　　黒澤　照弘　　澤口　宏　　土屋　健作　　宮田　毅
群馬県教育委員会事務局文化財保護課　　（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　　板倉町文化財資料館
館林市都市建設部都市計画課・道路河川課　　館林市政策企画部税務課　　館林市農業委員会

凡　　例

1．本書における挿図の縮尺は、図中に記した。「出土遺物写真」の縮尺は実測図と同様である。
2．遺跡位置図等は、平成 22 年度発行の館林市都市計画図（一部平成 25 年度発行）を用いた。
3．土層断面および出土遺物の注記に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修「新版土色帖」に従った。一部、調査担当者の目視による判断も含まれる。

参 考 文 献

群馬縣邑樂郡役所　1911『明治四十三年群馬縣邑樂郡水害誌』
館林市教育委員会　『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第１集～第 53 集
館林市教育委員会　2010『館林市史　特別編第４巻　館林城と中近世の遺跡』
館林市教育委員会　2011『館林市史　資料編１　館林の遺跡と古代史』
館林市教育委員会　2015『館林市史　通史編１　館林の原始古代・中世』
金井忠夫　1997『利根川の歴史－源流から河口までー』日本図書刊行会
黒澤照弘　2009「館林市における土師器皿の変遷－ 15 ～ 17 世紀を中心にしてー」『館林市史研究おはらき』第３号

目　　次

例　言
凡　例
参考文献
目　次
挿図表目次
写真図版目次
第１章　館林市の環境
　１．地理的環境 …… １
　２．歴史的環境 …… １・２
第２章　試掘・確認調査の概要
　１．笹原遺跡（平 27 地点） …… ３
　２．下遺跡（平 27 地点） …… ４・５
　３．咄戸沼遺跡（平 27 地点） …… ６～８
　４．北小袋遺跡（平 28 Ａ地点） …… ９・10
　５．萩原遺跡（平 28 地点） ……11
　６．法正谷遺跡（平 28 地点） ……12・13
　７．高根古墳群（平 28 地点） ……14
　８．八方遺跡（平 28 地点） ……15・16
　９．大原道東遺跡（平 28 地点） …… 17～20
　10．中山東遺跡（平 28 地点） ……21
　11．当郷遺跡（平 28 地点） …… 22～24
　12．北小袋遺跡（平 28 Ｂ地点） ……25
　遺物観察表 ……26・27
写真図版
報告書抄録

挿 図 表 目 次

第１図　館林市の位置 …… １
第２図　館林市の地形概念図 …… ２
第３図　平成 27・28 年度調査遺跡の位置 …… ２
第４図　笹原遺跡（平 27 地点） …… ３
第５図　調査区位置 …… ３
第６図　出土遺物 …… ３
第７図　下遺跡（平 27 地点） …… ４
第８図　基本層序 …… ４
第９図　調査区位置と遺構配置 …… ４
第 10 図　出土遺物 …… ５
第 11 図　咄戸沼遺跡（平 27 地点） …… ６
第 12 図　基本層序 …… ６
第 13 図　調査区位置と遺構配置 …… ７
第 14 図　出土遺物 …… ７
第 15 図　出土遺物 …… ８
第 16 図　北小袋遺跡（平 28 Ａ地点） …… ９
第 17 図　基本層序 …… ９
第 18 図　調査区位置と遺構配置 ……10
第 19 図　萩原遺跡（平 28 地点） ……11
第 20 図　基本層序 ……11
第 21 図　調査区位置 ……11
第 22 図　出土遺物 ……11
第 23 図　法正谷遺跡（平 28 地点） ……12
第 24 図　基本層序 ……12
第 25 図　調査区位置と遺構配置 ……13
第 26 図　出土遺物 ……13
第 27 図　高根古墳群（平 28 地点） ……14
第 28 図　基本層序 ……14
第 29 図　調査区位置 ……14
第 30 図　出土遺物 ……14
第 31 図　八方遺跡（平 28 地点） ……15
第 32 図　基本層序 ……15
第 33 図　調査区位置と遺構配置 ……16
第 34 図　出土遺物 ……16
第 35 図　大原道東遺跡（平 28 地点） ……17
第 36 図　基本層序 ……17
第 37 図　調査区位置と遺構配置 ……18
第 38 図　出土遺物 ……19

第 39 図　出土遺物 ……20
第 40 図　中山東遺跡（平 28 地点）……21
第 41 図　基本層序 ……21
第 42 図　調査区位置 ……21
第 43 図　出土遺物 ……21
第 44 図　当郷遺跡（平 28 地点） ……22
第 45 図　基本層序 ……22
第 46 図　調査区位置と遺構配置 ……23
第 47 図　邑樂郡水害略圖……24
第 48 図　出土遺物 ……24
第 49 図　北小袋遺跡（平 28 B地点）……25
第 50 図　調査区位置と遺構配置 ……25

写 真 図 版 目 次

笹原遺跡（平 27地点）
1－1　調査区全景
1－2　精査前
1－3　溝１精査前
1－4　溝１精査後
1－5　精査後
1－6　溝２土層断面

下遺跡（平 27地点）
2－1　精査前
2－2　精査後
2－3　土層断面西端
2－4　土層断面東端
2－5　土木重機による埋戻し
2－6　調査完了

咄戸沼遺跡（平 27地点）
3－1　土木重機による掘削
3－2　トレンチ１精査前
3－3　トレンチ１精査後
3－4　トレンチ２精査後
3－5　トレンチ１土坑４遺物集中箇所
3－6　トレンチ１土坑４精査後

北小袋遺跡（平 28Ａ地点）
4－1　調査地全景
4－2　土木重機による掘削
4－3　トレンチ２精査前
4－4　トレンチ２精査後
4－5　トレンチ２深掘部
4－6　トレンチ２土坑２精査後

萩原遺跡（平 28地点）
5－1　調査地全景
5－2　精査前
5－3　土坑２精査後
5－4　性格不明遺構１
5－5　精査後
5－6　土坑３精査後
5－7　人力による埋戻し

法正谷遺跡（平 28地点）
6－1　調査地全景
6－2　土木重機による掘削
6－3　トレンチ２精査前
6－4　トレンチ２土坑１精査前
6－5　トレンチ１精査後
6－6　トレンチ２精査後
6－7　トレンチ１土層断面

高根古墳群（平 28地点）
7－1　調査地全景
7－2　土木重機による掘削
7－3　精査前
7－4　精査後
7－5　土層断面１
7－6　土層断面２

八方遺跡（平 28地点）
8－1　調査地全景
8－2　土木重機による掘削
8－3　トレンチ２土層断面
8－4　トレンチ１土層断面
8－5　トレンチ１精査後
8－6　トレンチ１土層断面東端
8－7　トレンチ１土層断面

大原道東遺跡（平 28地点）
9－1　調査地全景
9－2　土木重機による掘削
9－3　精査前
9－4　土坑１遺物出土状況
9－5　大形漏斗状透彫耳飾出土状況
9－6　遺物集中箇所
9－7　遺物集中箇所精査後
10－8　精査後
10－9　土坑２精査後
10－10　土坑２拡張
10－11　住居１土層断面
10－12　住居１土層断面
10－13　土層断面
10－14　調査完了

中山東遺跡（平 28地点）
11－1　トレンチ外土抗断面
11－2　精査前
11－3　溝１精査後
11－4　土坑３精査後
11－5　精査後
11－6　土木重機による埋戻し
11－7　調査完了

当郷遺跡（平 28地点）
12－1　調査地全景
12－2　土木重機による掘削
12－3　トレンチ１精査前
12－4　トレンチ２精査前
12－5　トレンチ１精査後
12－6　トレンチ１攪乱部
13－7　トレンチ２精査後
13－8　トレンチ２遺物集中箇所
13－9　トレンチ２遺物出土状況
13－10　トレンチ２土層断面
13－11　トレンチ２砂層堆積状況
13－12　土木重機による埋戻し
13－13　調査完了

北小袋遺跡（平 28Ｂ地点）
14－1　調査地全景
14－2　土木重機による掘削
14－3　精査後
14－4　土層断面
14－5　発掘作業風景
14－6　調査完了

出土遺物写真

第１章　館林市の環境

１．　地理的環境

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口約８万人の都市である。市域は東西約 15.5㎞、南北約 8.0㎞と東西に長く、総面積は約 60k ㎡である。北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町に、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町に接する。明和町の南には利根川が東流し、群馬県と埼玉県の県境となっている。県庁所在地の前橋市までは約 50㎞、東京（台東区浅草）へは約 65㎞の距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県南東部は、「邑楽・館林」地域と呼ばれ、標高 15ｍ台（大島町東部）から 33ｍ台（高根町）の平坦な低地である。本市の地形を概観すると、「洪積台地」と「沖積低地」に分けることができる。市街地が立地する「洪積台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「沖積低地」が広がる。

第１図　館林市の位置

この台地は、「邑楽・館林台地」と呼ばれており、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から本市高根にいたる台地の北側に沿って、日本最古（約６～７万年前）の砂丘の一つである埋積河畔砂丘（館林古砂丘）が走っており、本市最高標高点（33.2ｍ）はこの上にある。

おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼など大小の沼や湿地帯が形成されている。こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向がみられ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は樹枝状に開析され、沖積低地に延びる多くの谷地を形成している。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川および城沼にかけての谷で、台地を南北に二分している。こうした洪積台地の谷には茂林寺沼・蛇沼・近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴の一つとなっている。

２．　歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和 63 年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの 144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである（複合した時代の遺物散布地がみられるため、その中心になると考えられる時代でまとめたもの）。

旧石器時代は３遺跡、縄文時代は 13 遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は確認されていない（弥生時代の遺物を採取できた遺跡２遺跡）。古墳時代～平安時代は（土師器の出土した遺跡）97 遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は 24 遺跡）、古墳は 17 遺跡（古墳総数 25 基）、中世生産址１遺跡、中世城館址 12 遺跡、近世城館址２遺跡である。

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっており、館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

≪旧石器時代≫

この時代の遺跡は、山神脇遺跡や水溜第一地点遺跡・同第二地点遺跡など、邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる埋積河畔砂丘（自然堤防）上で多く分布している。また、大袋Ⅱ遺跡や間堀１遺跡など低地を望む台地の突端の遺跡でも当該期と考えられる資料が確認されている。

≪縄文時代≫

この時代になると、遺跡数が増加し洪積台地上に遺跡が分布する。前期や中期の遺跡は、加法師遺跡や間堀１遺跡など、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に集落を形成している。確認できる遺跡数は後期以降減少するが、洪水堆積層の下で確認できることが多く、より低地で痕跡が残される傾向がある。

≪弥生時代≫

弥生時代の遺構は確認されていないが、大袋Ⅰ遺跡や小林遺跡など微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

≪古墳時代≫

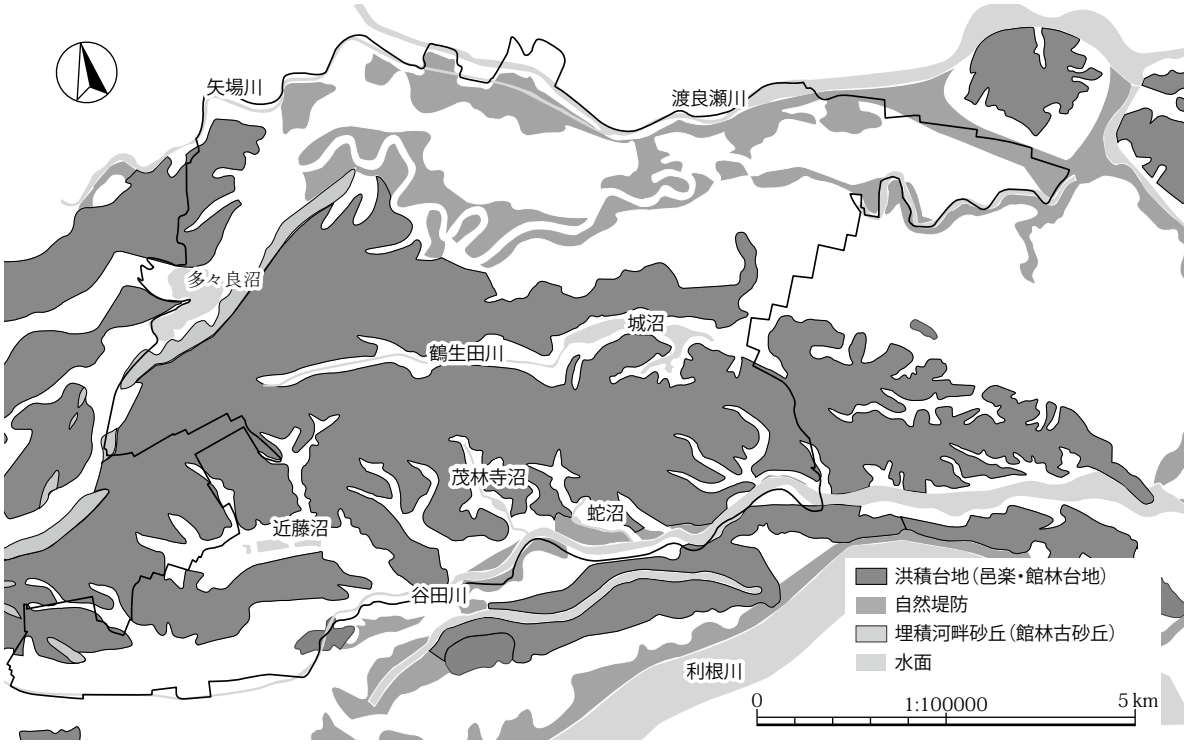
前期の遺跡は少ない。道満遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在しており、この傾向は弥生時代の遺物散布に似ている。中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。後期には、遺跡数は増大し、北近藤第一地点遺跡や当郷遺跡など台地上の平坦部に所在する場合が多い。墳墓としての古墳は、推定地も含め 33 基が残存している（『館林市史　資料編１』参照）。古墳群が２ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする埋積河畔砂丘上にある。そのほかに単独のものも多いが、そのいずれも谷や谷地等をみおろす洪積台地上に所在している。

≪奈良・平安時代≫

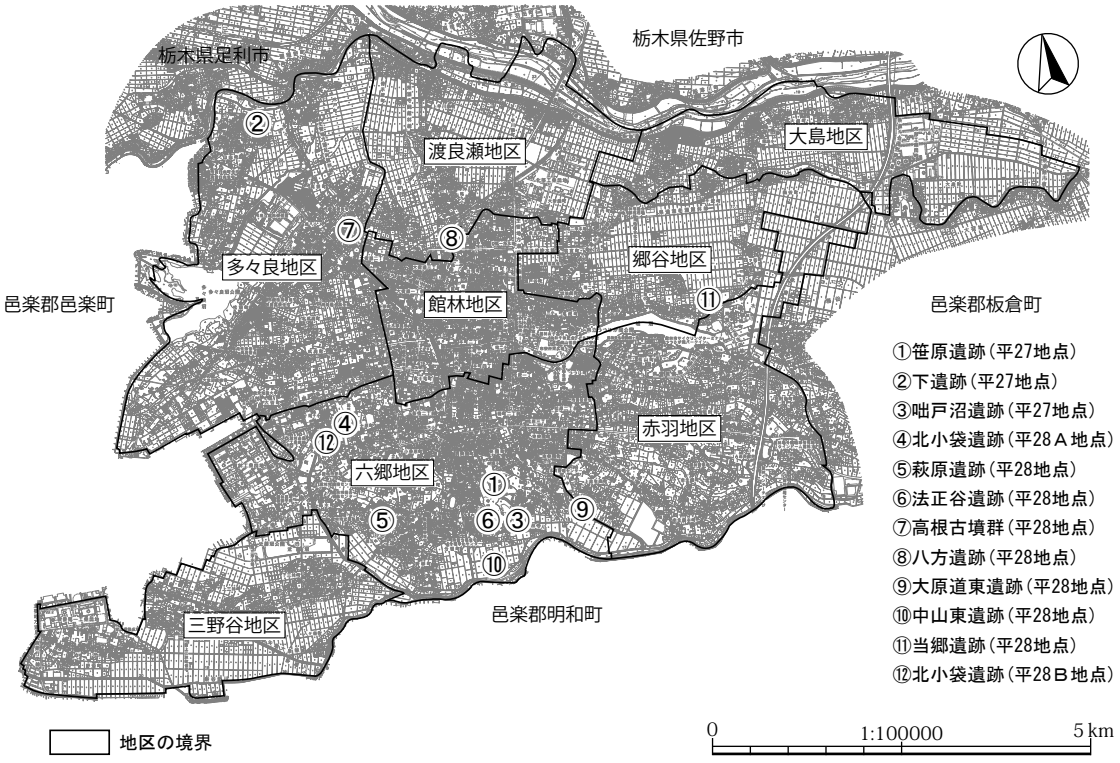
この時代の遺跡は急増する。台地の端部に限定されず遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれていたと考えられる。

≪中世・近世≫

この時代の城館址については、伝承的な要素が多く実体は判然としない。しかし、谷や小河川などの自然地形を利用し、中世末には館林城が、近世には館林城を中心として城下町が形成され、その町割りは今も残っている。



第２図　館林市の地形概念図

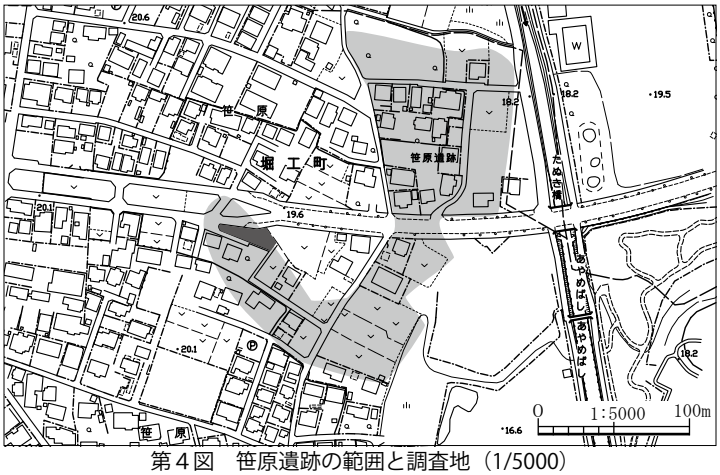


第３図　平成27・28年度調査遺跡の位置

第２章　試掘・確認調査の概要

１．笹原遺跡（平 27 地点）

遺跡番号　0101
時代種別　縄文・平安（散布地）
調 査 地　館林市堀工町字笹原 1873－２
調査原因　個人住宅
調査期間　平成 28 年1月 18 日～1月 21 日
調査面積　約 24 ㎡



第４図　笹原遺跡の範囲と調査地（1/5000）

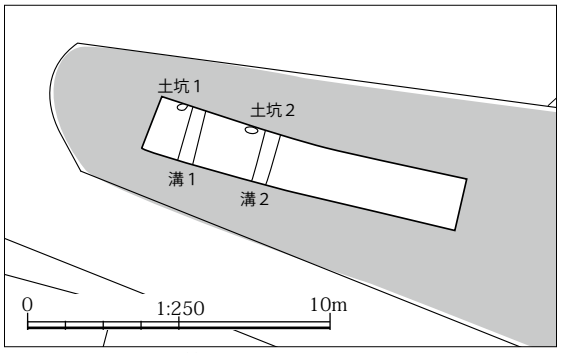
（１）遺跡と周辺の環境

笹原遺跡は館林市の南部、茂林寺沼の西に位置し、旧石器・縄文・平安時代の遺物が出土する。周囲には茂林寺や県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」など自然が多く残る地域であるが、近年は住宅地などの開発が盛んである。本遺跡は邑楽・館林台地の南辺で、茂林寺沼へと延びる樹枝状の谷を望む舌状台地上に広がっており、標高は約 19.3 ｍである。

同遺跡ではこれまでに７地点で調査が行われている。特に昭和 58 年度と昭和 61 年度に行われた調査では旧石器時代から縄文時代の遺物が多量に出土している。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲とその地形に合わせ、東西方向に１本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。



第５図　調査区位置

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅳ層である。調査地はこれまで駐車場として利用されており、転圧の影響か土中は固く締まっている。

Ⅰ層は砕石の層（層厚約 20cm）で、駐車場として利用されていた。Ⅱ層は暗褐色土層（10YR3/4）である。層厚約 10cm。Ⅲ層も暗褐色土層（10YR3/4）であるが、Ⅱ層よりローム粒が多い。層厚約 10cm。Ⅳ層がローム層（褐色 7.5YR4/4）である。

（４）確認された遺構

トレンチ内では土坑２基と溝２条が確認されたが、その性格・年代を明らかにすることはできなかった。

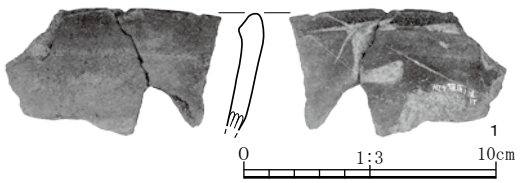
土坑はいずれも小規模で不整形で遺物は伴わない。

溝２条はいずれも南北に走り、溝１は約５cmの掘り込みでごく浅いものである。遺物はない。溝２は確認面から約 30 cmで底面に至る。壁・床面ともに締まりは弱い。溝内からは縄文土器片・土師器片・陶磁器片がみられた。本地点北側には笹原遺跡（平 16 Ａ地点）があり、その際にも南北に走る溝が確認されている。この溝についてはそれとの関連が考えられるが、関連を明確に示す資料は得られなかった。確認できた遺物の年代はそれぞれ異なっており、水の流れなどの影響によるものと思われ、直接溝の年代を示すものではない。

溝１・２のいずれも性格・年代は不明であるが、調査区外へとさらに延びている。

（５）出土遺物

１は 15 世紀末～ 16 世紀初頭の内耳鍋である。口縁部内面に段がある。ほかに近世のカワラケや尾呂茶碗などが出土した。



第６図　出土遺物

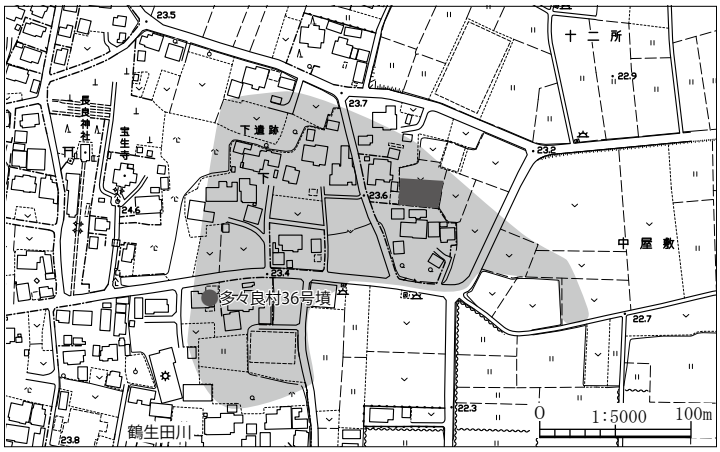
（６）まとめ

笹原遺跡では平成 26 年度に今回の地点より東、茂林寺沼湿原に近い場所で試掘確認調査が行われている。その際のトレンチ内部は含水量が多く、一部で粘土を含む層がみられるなど湿原の影響を強く受けている様子がみられ、今回の地点とは大きく様子が異なっていた。本地点ではそれらの特徴はみられず、この周辺が以前は湿原を望む高台の一部であり、人が生活できる地形であったことを今回の調査によって確認することができた。

調査の結果、対象となる遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

２．下遺跡（平 27 地点）

遺跡番号　0002
時代種別　古墳・平安（散布地）
調 査 地　館林市日向町字下 249- 6
調査原因　その他建物（農業用物置）
調査期間　平成 28 年２月 26 日～３月１日
調査面積　約 24 ㎡



第７図　下遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（１）遺跡と周辺の環境

下遺跡は館林市の北西に位置し、日向古墳群に隣接し、古墳・平安時代の遺物が出土する。現況は住宅地と農地としての利用が主である。本遺跡は北を矢場川、南を多々良沼の北方に広がる低湿地に挟まれた台地の東端にあり、標高は約 23.5 ｍである。

同遺跡では平成６年度に調査が行われている。その際には多々良村 36 号墳の周濠が確認され、須恵器の大甕などの遺物が出土した。

今回届出のあった土地は遺跡の北東端付近に位置し､以前調査が行われた平６地点の北東約 100 ｍ付近である。

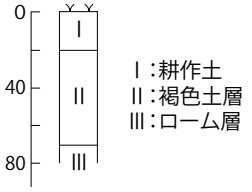
（２）調査の概要

工事予定区域の範囲とその地形に合わせ、東西方向に１本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅲ層である。調査地の地目は山林であるが、近年は畑等に利用されている。土中にもビニール等のゴミが混ざっており、近年の土地利用の影響を多く受けている。

Ⅰ層は耕作土（層厚約 20㎝）。Ⅱ層は褐色土層（10YR4/4）で漸位層である。層厚約 50㎝。Ⅲ層はローム層（褐色 7.5YR4/6）である。

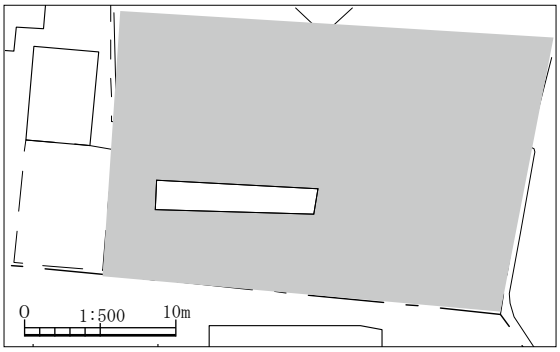


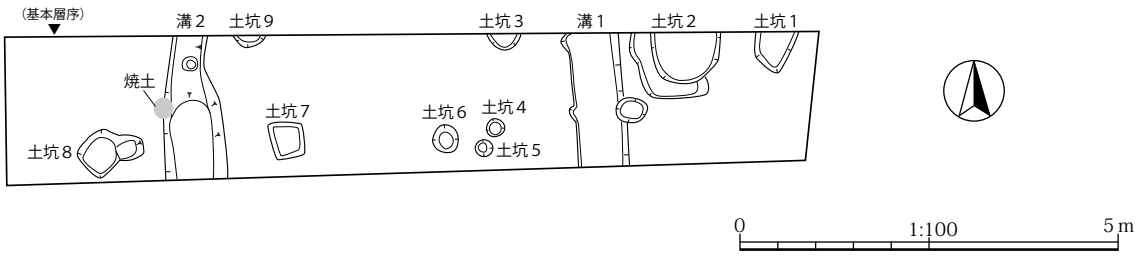
第８図　基本層序

（４）確認された遺構

トレンチ内では土坑９基と溝２条が確認されたが、その性格・年代を明らかにすることはできなかった。

溝１内には掘り込みが１か所あり、６土坑と形状・深度に類似性がみられた。どちらも底に向けて窄まり、底部の土は固く締まっていた。柱穴の可能性も考えられたが、ほかに対応する土坑を確認できなかった。





第９図　調査区位置と遺構配置

平成６年度の調査では、古墳（多々良村 36 号墳）の周濠と思われる溝１条が確認された。平 27 地点においても古墳時代の遺物はみつかったが、直接的に古墳との関連を示す遺構は確認できなかった。

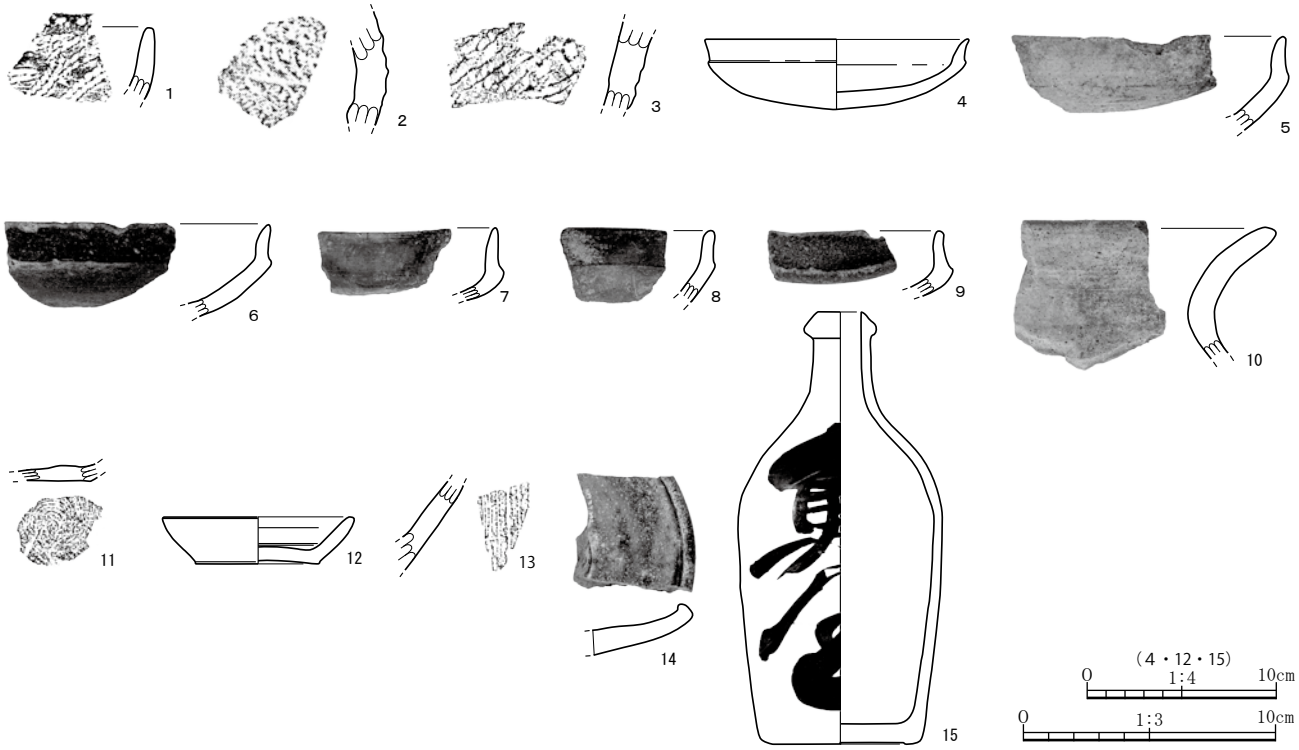
（５）出土遺物

縄文時代前期の土器片から近現代の徳利まで幅広く出土した。１～３は縄文時代前期の土器片である。１はR ２条を巻き付けた絡条体を回転施文したと考えられる。２は胴部片で横位に RL のループ文を施す。４～ 10 は古墳時代後期の土師器である。４は口縁部が外反し、丸味のある体部で底部が浅くなっており、当郷遺跡の本発掘調査（平 25 地点）の編年表に照らし合せてみると、Ⅳ期（６世紀後葉～７世紀中葉）に該当する。平成６年度の出土遺物と形態を比較するとやや新しい資料であると推察されるが、日向古墳群が６世紀～７世紀の群集墳と考えられており、大きくその年代を異にするものではない。15 は徳利であり「魚屋」の銘が印される。ほかにも近世のカワラケやすり鉢・燈明具などが出土した。

（６）まとめ

下遺跡ではこれまでに平成６年度に調査が行われている。本地点では土坑と溝が確認されており、縄文・古墳時代、中世・近世の多様な遺物が出土したが、遺構の年代・性格は不明である。多々良村 36 号墳は本地点から南西に 100 mほどの場所であり、古墳との関係を直接示す資料や遺構は確認できなかった。

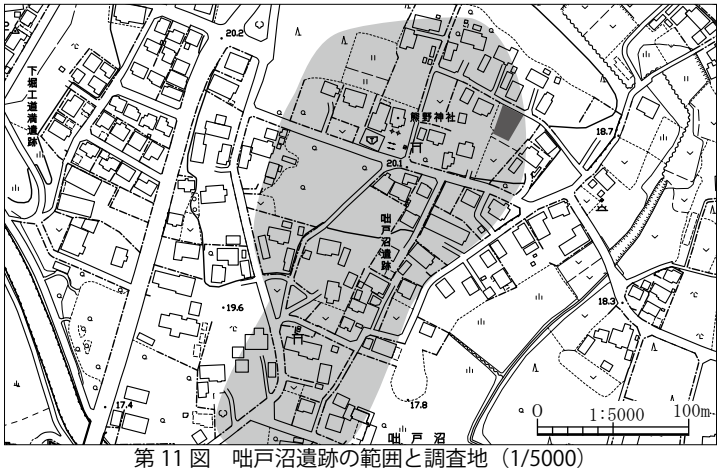
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第 10 図　出土遺物

３．咄戸沼遺跡（平 27 地点）

遺跡番号　0109
時代種別　縄文（散布地）
調 査 地　館林市堀工町字熊野浦 741- 4
調査原因　個人住宅
調査期間　平成 28 年３月 18 日～３月 26 日
調査面積　約 33 ㎡



第 11 図　咄戸沼遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（１）遺跡と周辺の環境

咄戸沼遺跡は館林市の南部、茂林寺沼の東岸に位置し、縄文時代の遺物が出土する。周囲には茂林寺や県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」など自然が多く残る地域であるが、近年は住宅地などの開発が行われている。本遺跡は邑楽・館林台地の南辺で、茂林寺沼へと延びる樹枝状の谷を望む舌状台地上に広がっており、標高は約 20.3 ｍである。

同遺跡ではこれまでに５度の調査が行われている。調査成果からは、遺跡北部では縄文時代の遺物が、南部では中近世の遺物が多くみられる傾向にある。

今回の調査対象地は、遺跡の北部に位置し、平成 26 年度調査地点の北東約 100 ｍ付近である。なお、平成 17 年度調査地点からは多量の縄文時代中期の土器が出土した。

（２）調査の概要

工事予定区域の範囲とその地形に合わせ、南北方向に２本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅲ層である。

Ⅰ層は耕作土（層厚約 20㎝）。Ⅱ層は褐色土層（7.5YR4/3）で漸位層である。層厚約 20㎝。Ⅲ層はローム層（褐色 7.5YR4/4）である。

第12図　基本層序

（４）確認された遺構

トレンチ内では土坑６基と溝１条が確認された。

土坑４は地表より約 40 ～ 50 ㎝の深さに二枚貝や巻貝の貝殻の堆積層（層厚約 10 ㎝）がみられる。貝層の形成年代は不明であるが､層中から寛永通宝１点を確認した。近世陶磁器を中心に、ほかにも縄文土器片が出土した。土坑６は楕円形で、最大径は約 1.4 ｍである。漏斗状に掘り込まれ、覆土の粘性はないが、固く締まっている。縄文土器が多く出土した。

各土坑において出土した遺物の年代に偏りはあるものの、年代・性格を判断することはできなかった。

溝１は東西に走り、調査区外へさらに延びている。覆土にビニールが含まれていたことから現代の攪乱であると考えられる。

（５）出土遺物

確認された遺物は、近世の陶磁器や焙烙を中心に、縄文時代前期～晩期の土器片が出土した。

特徴的な遺物としては、17･18 は綱取式など東北系の土器と考えられる。２は LR に L の付加条縄文で、１･21･22 は無節 L を縦位に施文している。また、近世の陶磁器が多く出土し、46 は口縁部に穿孔が施され、針金が巻いた状態で出土した。これら近世陶磁器の多くは土坑４からの出土であり、貝殻の年代は不明ながら、寛永通宝や陶磁器の年代から、近世後半に破棄されたものと推察される。

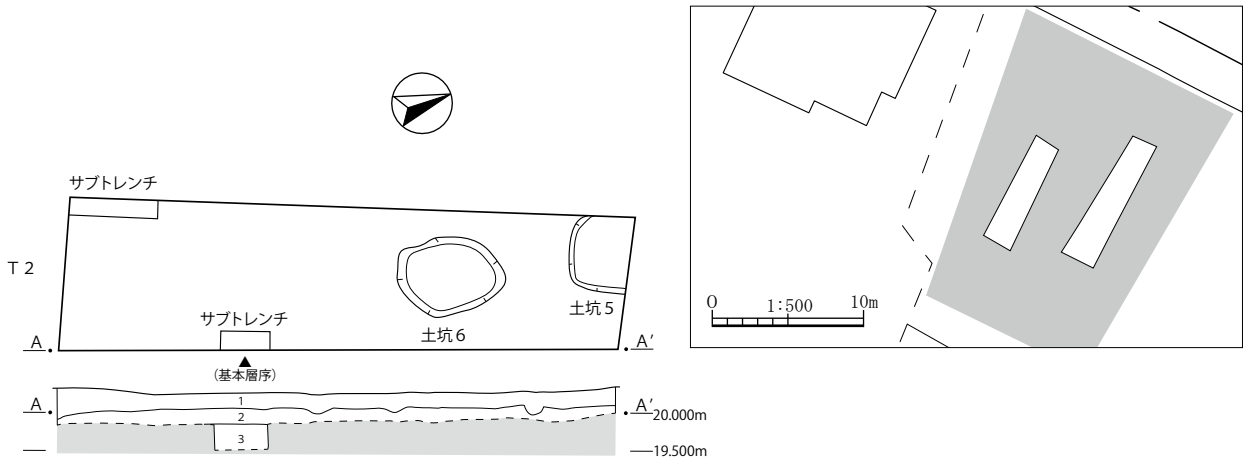
（６）まとめ

咄戸沼遺跡ではこれまでに５度の調査（平 14･17･19 Ａ･19 Ｂ･26 地点）が行われている。特に、平 17 地点からは広い範囲で縄文時代中期の土器が多量に確認されており、平 19 Ａ地点から中近世の土器片や土師器片が出土している。本遺跡の傾向として、範囲北部では縄文時代の遺物が確認できるが、南部ではそれらの確認が少ない傾向にある。

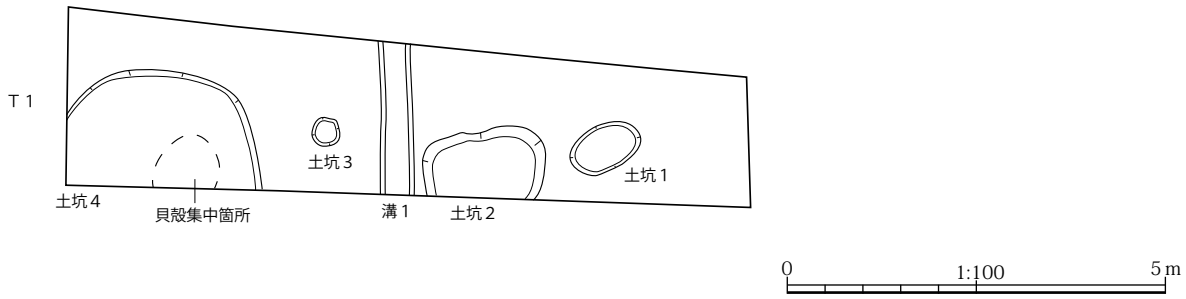
今回の調査で確認された遺物は縄文土器を中心とするが、近世陶磁器も多く、そのほかにも中世あるいは近代以降の遺物など、多くの遺物が確認された。これは遺跡の遺物出土傾向とも合致する。

土坑４出土の寛永通宝と陶磁器類の同時代性から、近世以降の遺物に関しては一括性が高いと考えられる。

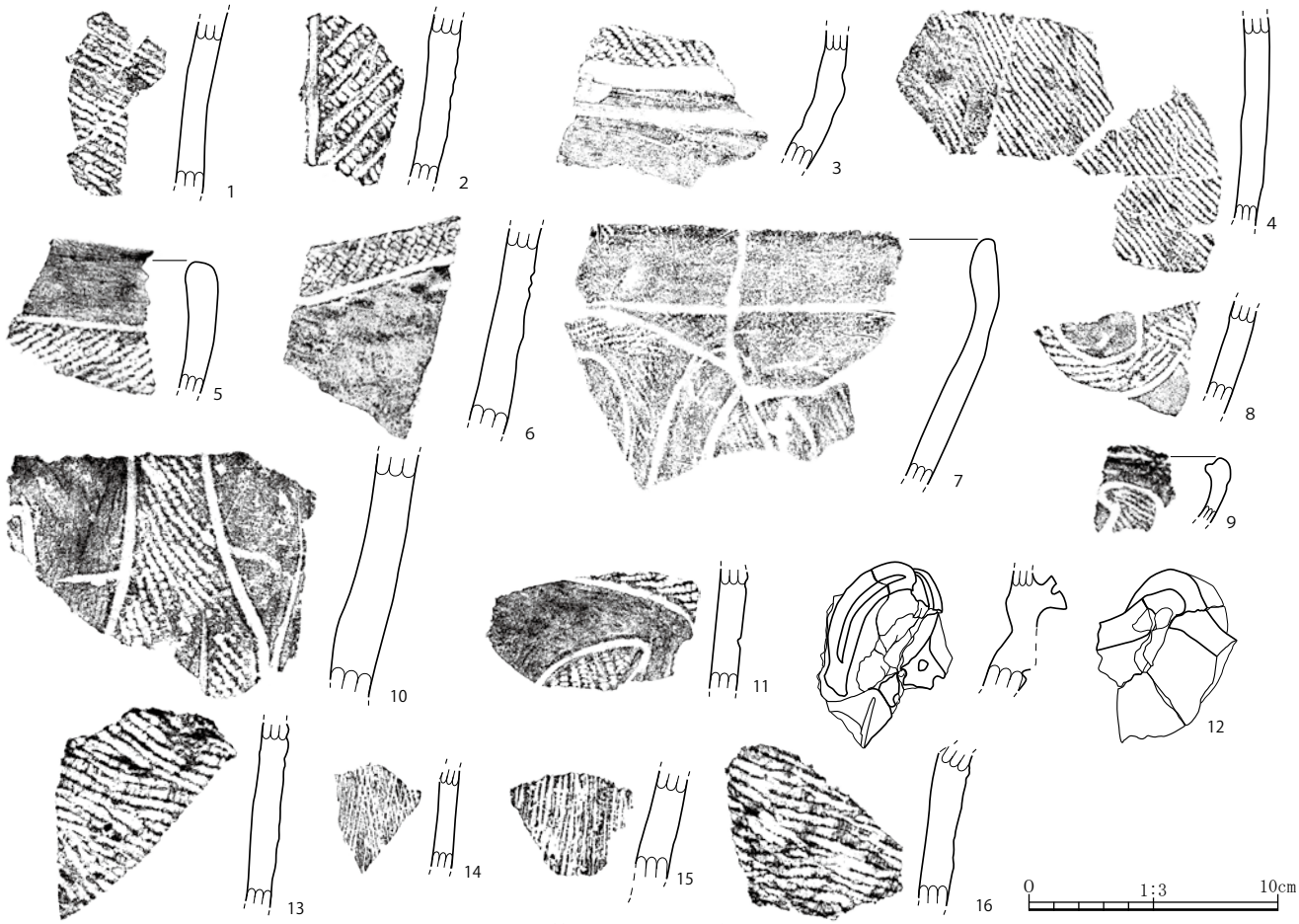
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



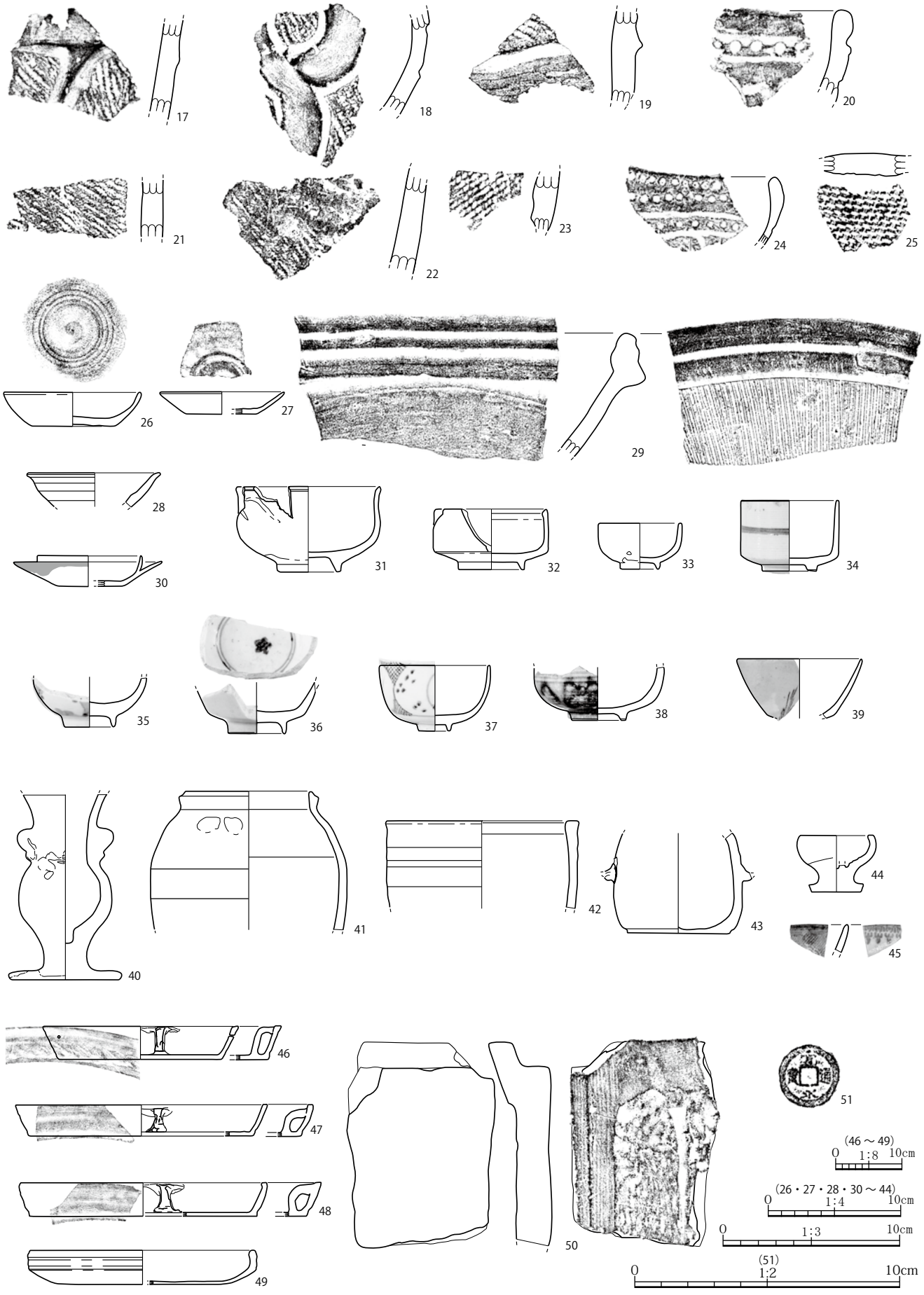
1　暗褐色 10YR 3/3　粘性締まりなし
2　褐色 7.5YR 4/3　粘性ややあり　締まりなし
3　褐色 7.5YR 4/4　粘性締まりなし



第 13 図　調査区位置と遺構配置



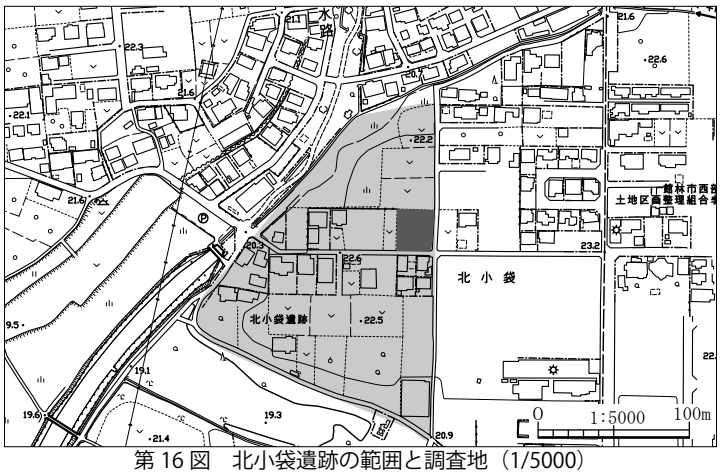
第 14 図　出土遺物


17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
29
28
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
(46～49)
0 1:8 10cm
(26・27・28・30～44)
0 1:4 10cm
0 1:3 10cm
(51)
0 1:2 10cm

第 15 図　出土遺物

４．北小袋遺跡（平 28 Ａ地点）

遺跡番号　0054
時代種別　縄文（散布地）
調 査 地　館林市近藤町字北小袋 171-60
調査原因　個人住宅
調査期間　平成 28 年４月 26 日～５月６日
調査面積　約 107 ㎡



第 16 図　北小袋遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（１）遺跡と周辺の環境

北小袋遺跡は館林市の南西、近藤沼の北に位置し、旧石器・縄文時代の遺物が出土する。現況は住宅地と農地としての利用が主である。本遺跡は近藤沼から延びる大きな谷が樹支状の支谷に分かれる舌状台地上に位置し、標高は約 22.4ｍである。

同遺跡ではこれまでに４地点で調査が行われている。特に昭和 61 年度の調査では、旧石器時代の石器と縄文時代早期・前期の土器片が出土している。

今回届出のあった土地は遺跡の東端付近に位置し、崖線部から上がり平らな台地が広がる地点である。

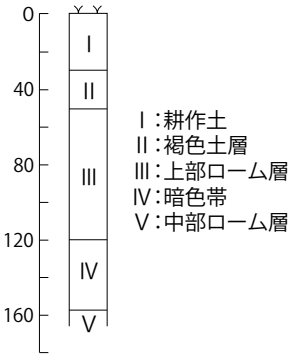
（２）調査の概要

工事予定区域の範囲とその地形に合わせ、東西方向に３本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅴ層である。調査地の現況はほぼ平らであり、表層に小礫などが散見される。

Ⅰ層は耕作土（層厚約 30cm）である。Ⅱ層は褐色土層（7.5YR4/4）で、ローム層との漸位層（層厚約 20cm）で締まりはない。Ⅲ層は上部ローム層（明褐色 7.5YR5/6）であり、締まりの強さで２層にわけられる。層厚約 70cm。Ⅳ層は暗色帯（暗褐色 7.5YR3/3）であり、締まり・粘性ともに強い。層厚約 40cm。Ⅴ層は中部ローム層（黄褐色 10YR5/6）で、締まり・粘性ともに強い。



第17図　基本層序

（４）確認された遺構

トレンチ内では土坑６基が確認された。

土坑５～６からは覆土中よりビニールが確認できたことから、直近のゴミ捨て穴である。土坑１～３も堆積状況と形態的類似から同様の性格のものだと考えられる。土坑４に関しては、ほかの土坑と堆積状況と形態が異なっていたが、遺物もなく時期・性格ともに不明である。

（５）出土遺物

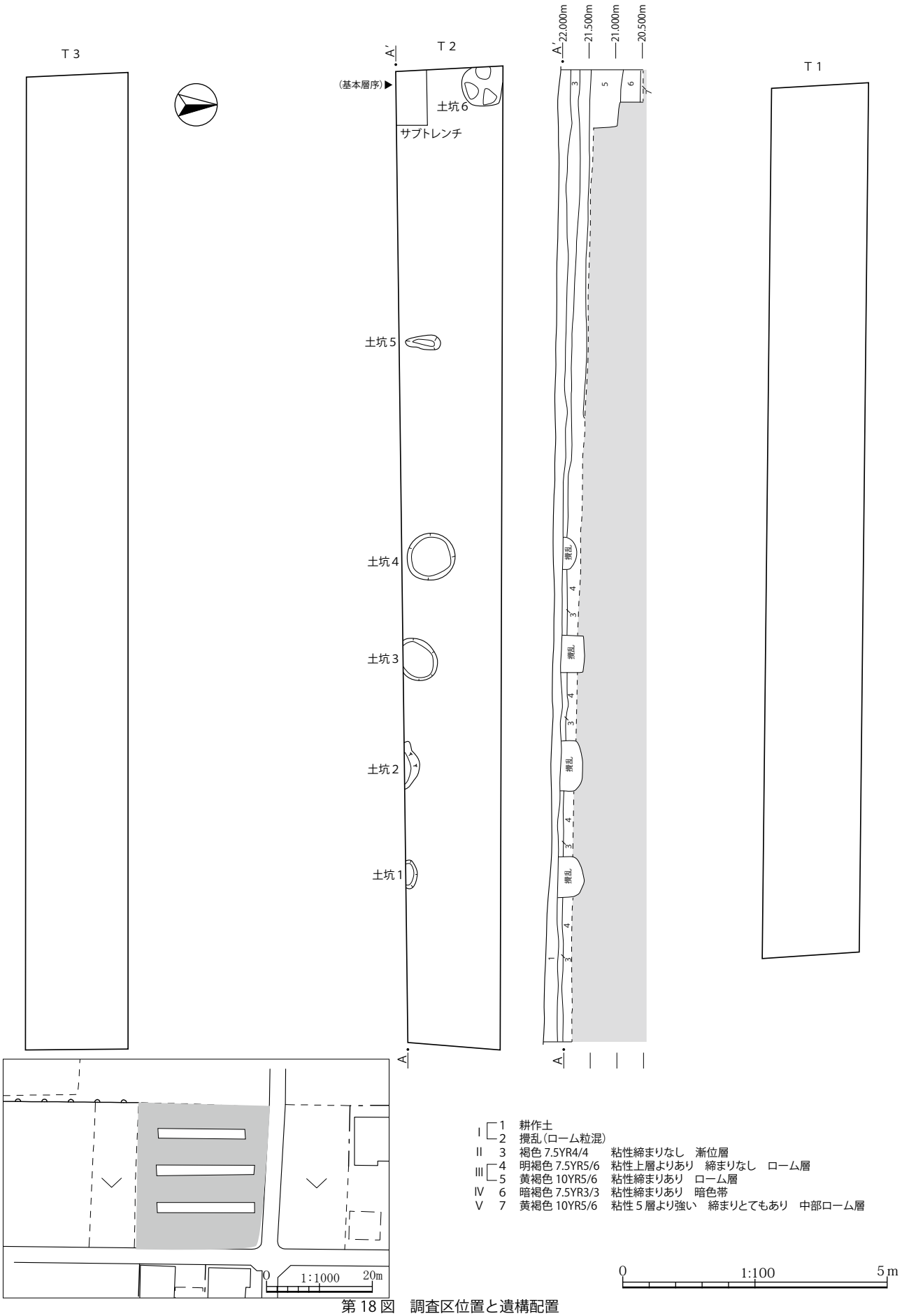
確認された遺物は縄文土器片や土師器片などであるが、小破片であり時期は判然としない。地表にはこぶし大の礫などもみられ、周辺と様相が異なることからほかの場所から運ばれた可能性があるため、表土付近の遺物が当地のものであるか不明確である。

（６）まとめ

北小袋遺跡ではこれまでに４度の調査（Ａ・Ｂ、平 18・20 地点）が行われている。特に、昭和 61 年度に今回の地点より南西、崖線部に近い場所で試掘確認調査が行われており、出土層位は明確ではないが旧石器時代の資料と考えられる黒曜石製の尖頭器も出土した。

本地点ではほとんど遺物は確認されなかったが、調査区西で暗色帯までの深度が表土から約 120cm（標高約 21.2ｍ）であること、暗色帯が約 40cm 堆積している状況が確認できた。過去の調査の堆積状況や古地図と比較すると、西側に広がる谷へは急激に落ち込むことが推察される。耕作土より下の堆積状況は良好であり、周辺にもまだ畑地が残されていることから、崖線部に近い地点やその周辺では今後旧石器時代の資料を層位的に確認できる可能性があると考えられる。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

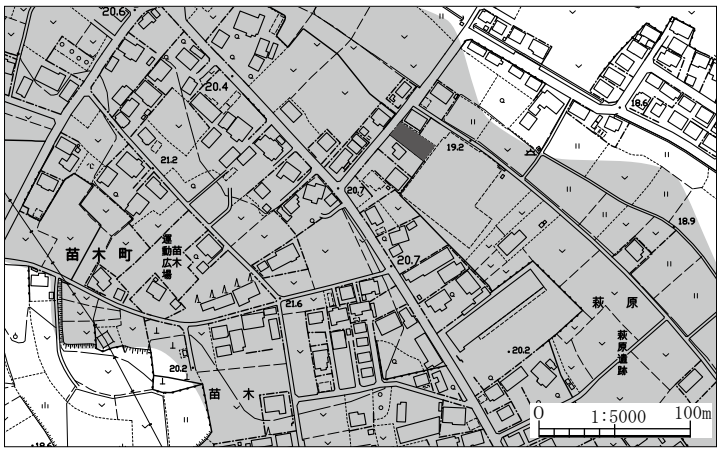


I 1 耕作土
I 2 攪乱(ローム粒混)
II 3 褐色 7.5YR4/4 粘性締まりなし 漸位層
III 4 明褐色 7.5YR5/6 粘性上層よりあり 締まりなし ローム層
III 5 黄褐色 10YR5/6 粘性締まりあり ローム層
IV 6 暗褐色 7.5YR3/3 粘性締まりあり 暗色帯
V 7 黄褐色 10YR5/6 粘性 5 層より強い 締まりとてもあり 中部ローム層

第 18 図 調査区位置と遺構配置

５．萩原遺跡（平 28 地点）

遺跡番号　0098
時代種別　縄文・平安（散布地）
調 査 地　館林市苗木町字萩原 1806-10
調査原因　個人住宅
調査期間　平成 28 年 7 月 14 日～ 7 月 26 日
調査面積　約 42.2 ㎡



第 19 図　萩原遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（1）遺跡と周辺の環境

萩原遺跡は館林市の南部、近藤沼の北東に位置し、縄文・平安時代の遺物と近世陶磁器が出土する。調査地周辺の現況は住宅地と農地の利用が主である。本遺跡は邑楽・館林台地の南辺で、近藤沼の谷の北東に広がるなだらかな舌状台地上に位置する、標高は約 20.5 ｍである。

同遺跡ではこれまでに３地点で調査が行われており、縄文時代の土器片や土師器片が出土している。

今回の調査対象地は、遺跡の中央よりやや北東付近に位置し、さらに北東部の低地部分へと緩やかに落ち込んでいく地点である。

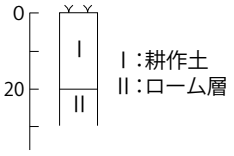
（2）調査の概要

工事予定区域の範囲とその地形に合わせ、東西方向に１本のトレンチを設定し、人力で表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（3）基本層序

本遺跡の基本層序は、Ⅰ層～Ⅱ層に分けられる。

Ⅰ層は耕作土（層厚約 40cm）である。Ⅱ層はローム層（褐色 7.5YR4/4）であるが、締まりが弱い。



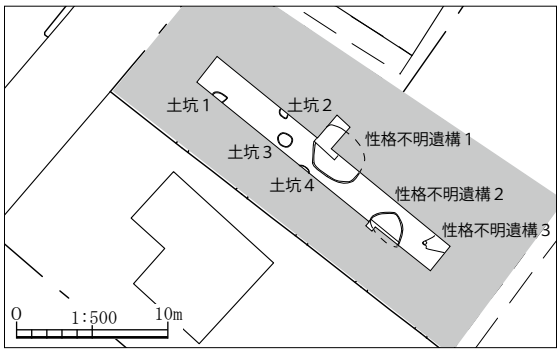
第20図　基本層序

（4）確認された遺構

土坑４基と性格不明遺構３基が確認された。

土坑は径 50cm、深さ 10cm 程度の楕円形である。土坑２で土師器が出土したが、ほかの土坑の上部からビニールがみつかっており、流れ込みの可能性がある。

性格不明遺構は３基ともローム層を不定形に掘り込んだ遺構である。性格不明遺構１・２はローム層を 50cm 程度掘り込んでいる。遺物が出土しないため年代は不明であるが、この場所が雑木林として利用されていたことや、不定形に人力で掘削されていること、遺物が何も出土せず、覆土もぼそぼそでローム粒を含んでいたことから、樹木移植の痕跡の可能性が高い。



第 21 図　調査区位置

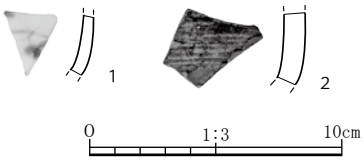
（5）出土遺物

確認された遺物は近世陶磁器など数点であった。1 は瀬戸・美濃と考えられる破片である。２は形態的特徴から半胴と考えられるが、小破片のため不明である。

（6）まとめ

萩原遺跡ではこれまでに３度の調査（平３・12・24 地点）が行われている。本地点では土坑と性格不明遺構が確認されたが、遺構の年代・性格は不明である。

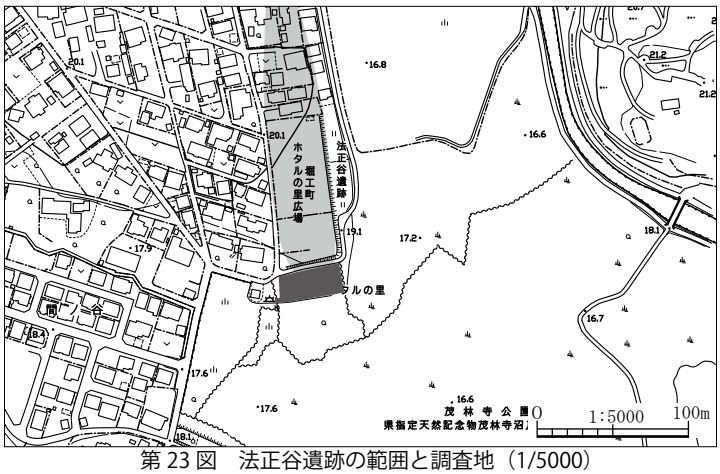
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第 22 図　出土遺物

６．法正谷遺跡（平 28 地点）

遺跡番号　0102
時代種別　平安（散布地）
調 査 地　館林市堀工町字法正谷 1746－１、1746－３
調査原因　集合住宅
調査期間　平成 28 年９月 26 日～ 10 月５日
調査面積　約 43.2 ㎡



第 23 図　法正谷遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（１）遺跡と周辺の環境

法正谷遺跡は館林市の南部、茂林寺沼の西に位置し、縄文・平安時代の遺物が出土する。周囲には茂林寺や県指定天然記念物「茂林寺沼及び低地湿原」など自然が多く残る地域であるが、近年は住宅地などの開発が盛んである。本遺跡は茂林寺沼を形成する開折谷西岸の台地上で茂林寺沼低地湿原に接する崖線部に位置し、標高は約 18.2 ｍである。

同遺跡では平成 15 年度（平 15 地点）に確認調査が実施され、平安時代のものと考えられる竪穴式住居址１軒が確認された。その際の土地利用では盛土を行い掘削の予定がないことから、本発掘調査は実施されていない。

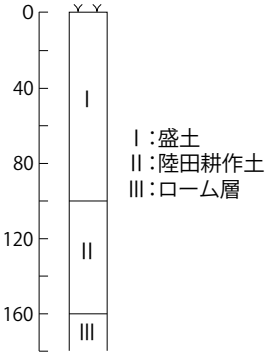
（２）調査の概要

工事予定区域の範囲とその地形に合わせ、東西方向に２本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序は、Ⅰ層～Ⅲ層に分けられる。調査地はこれまでに複数回盛土を行っており、調査地の南側の湿原に近い場所（トレンチ１）では盛土の影響で特に沈降している。

Ⅰ層は盛土（層厚約 100cm）であり、下水工事に関する残土と、その後の盛土である。トレンチ１では 40cm 大の礫もみられた。Ⅱ層は陸田耕作土である。層厚約 60cm。Ⅲ層はローム層（褐色 10YR4/4）であるが、低地の影響か砂質で含水率が高い。



第24図　基本層序

（４）確認された遺構

溝１条と性格不明遺構２基が確認された。遺物の出土はなく、時期・性格ともに不明である。

溝１はトレンチ２で確認されたが、遺物の出土はない。溝は南北に走り、調査区外へさらに延びている。

性格不明遺構１は東西に走る溝状の遺構であり、重機などの跡（代掻きの道具など）の可能性も考えられたが、トレンチ部分以外に広がっている状態を確認できず、水田耕作を行っていた時代は昭和 40 年代とのことだったので、近現代の痕跡であることは間違いないものと考えられる。トレンチ２東端にも不自然な落ち込みがあり、性格不明遺構２とした。

（５）出土遺物

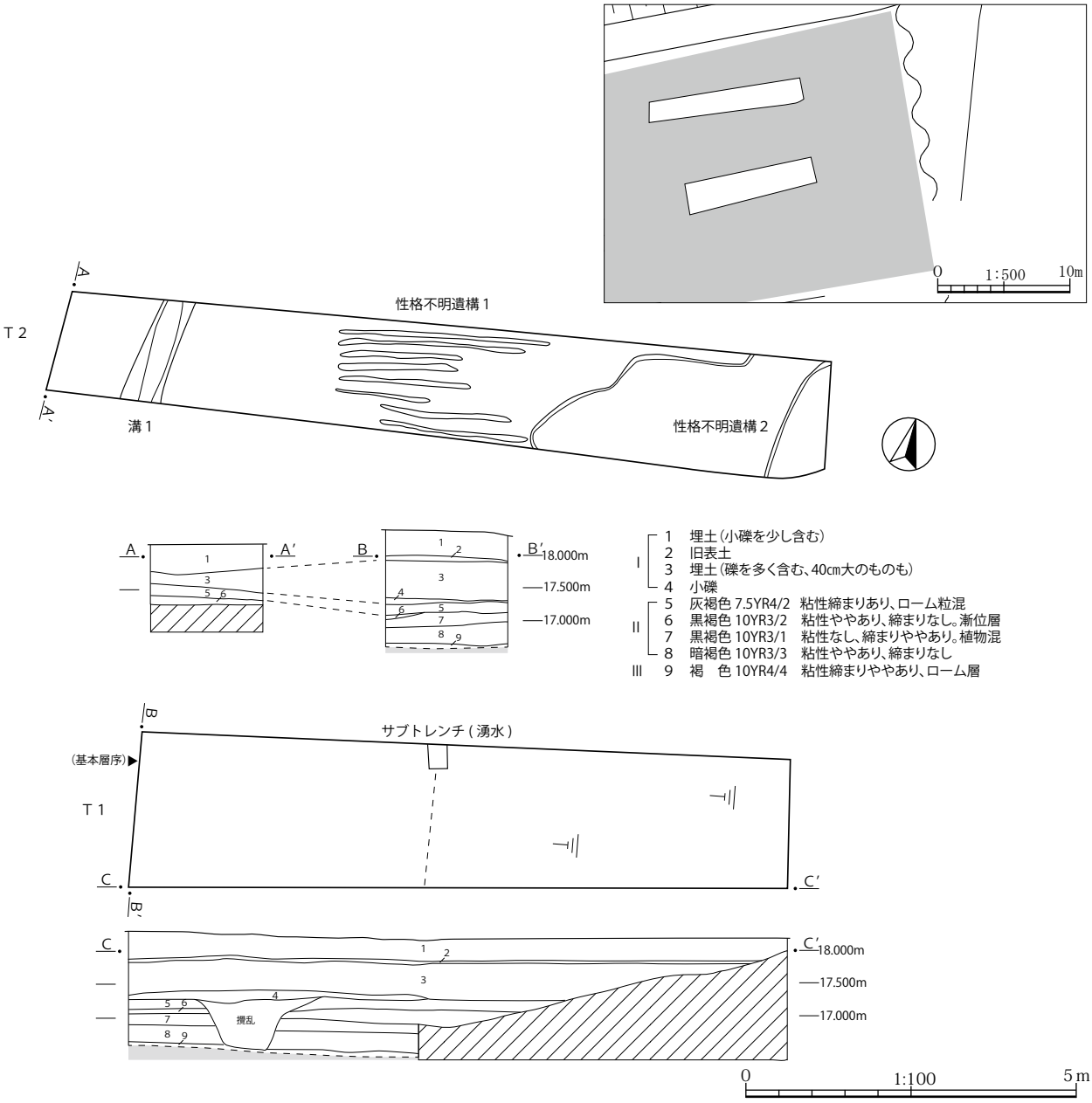
確認された遺物は縄文時代前期の関山式・黒浜式の破片がほとんどであった。ループ文や羽状縄文を施す破片もある。１点底部片が出土した。

（６）まとめ

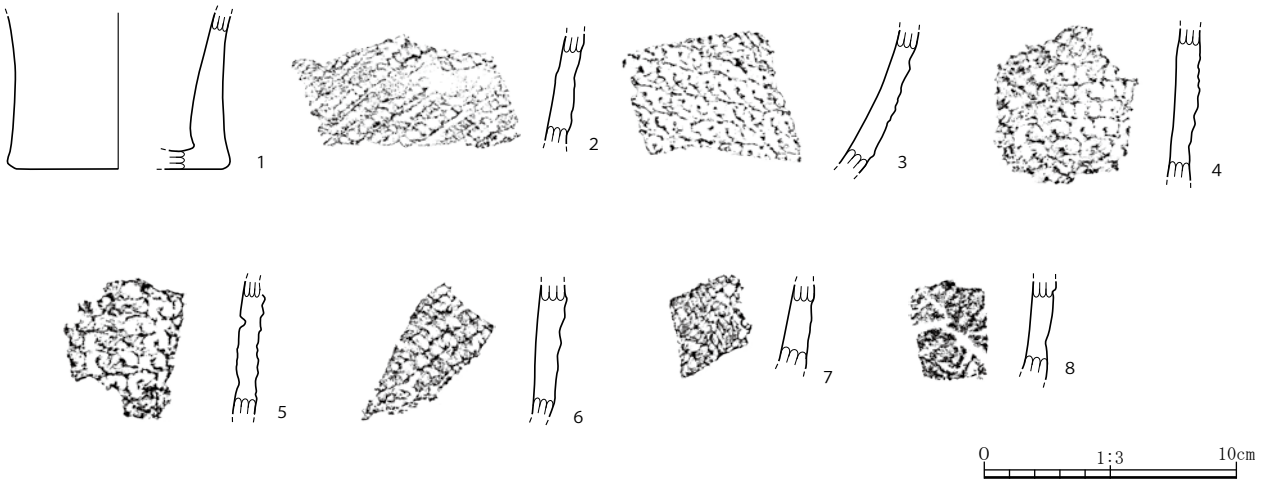
法正谷遺跡ではこれまで平成 15 年度に調査が行われている。本地点で出土した遺物の出土層位は明確ではないが、性格不明遺構など少し落ち込んだ部分から多く出土し、時代も多岐にわたっていた。低地であり、頻繁に水を被るような状況であった可能性が高く、ローム層とみられる層も砂質で含水率が高かった。調査地では、トレンチ１の深掘部（標高 16.36 ｍ）で湧水があったが、隣接する県指定天然記念物「茂林寺沼湿原及び低地湿原」の標高とほぼ同じである。

今回の調査と平成 15 年度に行われた調査を合わせ、包蔵地の大部分でトレンチ調査を実施したことになる。

調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



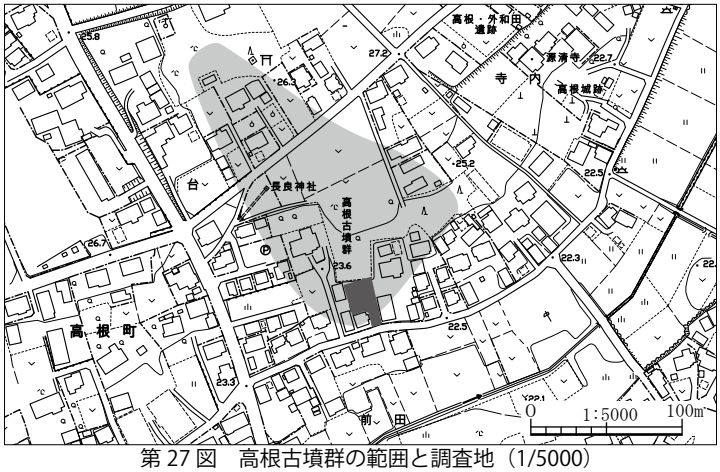
第 25 図　調査区位置と遺構配置



第 26 図　出土遺物

7．高根古墳群（平 28 地点）

遺跡番号　0010
時代種別　古墳（古墳）
調 査 地　館林市高根町字寺内 130- 3、130- 6 ～ 9
調査原因　個人住宅
調査期間　平成 28 年 10 月 25 日～ 10 月 26 日
調査面積　約 9 ㎡



第 27 図　高根古墳群の範囲と調査地（1/5000）

（1）遺跡と周辺の環境

高根古墳群は館林市の北、館林古砂丘の端部に位置する古墳群であり、『上毛古墳綜覧』には多々良村第 1 ～ 35 号墳として記載がある。現況は住宅地と農地としての利用が主である。標高は約 23.8 mである。

同古墳群では今回の調査地に近い 17 号墳や、天神二子古墳（多々良村第 4 号）で本発掘調査が行われている。天神二子古墳は高根古墳群の中で最大規模の前方後円墳とされ、群馬大学により実施された 2 度の調査では、多くの形象埴輪が出土した。

今回届出のあった土地は 17 号墳の南に位置し、館林古砂丘南側の斜面地に位置する。

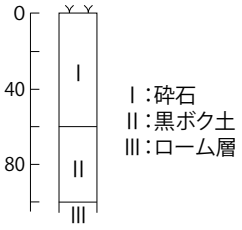
（2）調査の概要

工事予定地内の柱状の地盤改良の隙間に合わせて南北方向に 1 本のトレンチを設定し、土木重機により上部を覆っていた砕石などを排除した。その後、特に黒ボク土以下は土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（3）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅲ層である。調査地の現況はほぼ平らである。

Ⅰ層は砕石層（層厚約 60cm）である。Ⅱ層は（暗褐色 7.5YR3/3）で黒ボク土（層厚約 40cm）、粘性・締まりともにない。Ⅲ層はローム層（にぶい黄褐色 10YR5/4）であり、粘性があり固く締まっている。



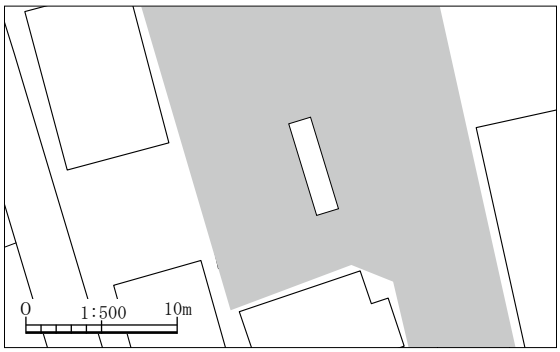
第28図　基本層序

（4）確認された遺構

遺構は確認されなかった。北から南への傾斜地であり、トレンチの中央部でくぼむ様相をみせたことから、周溝などの可能性も考慮したが、深さも 10cm 程度であり、覆土も上部の黒ボク土と同様であったため、遺構でないと判断した。

（5）出土遺物

確認された遺物はカワラケを含め数点であった。古墳に関する埴輪や土師器片などは確認できなかった。



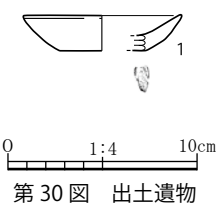
第 29 図　調査区位置

（6）まとめ

高根古墳群の中で今回の調査地に近い 17 号墳では、平成 2 年度に調査が行われ、平成 16 年度に市史編さん事業の一環で測量調査が行われている。平成 2 年度の調査では周溝と推定される掘り込みが確認され、土師器片や埴輪片が出土した。

今回の調査では柱状改良の隙間にトレンチを設定したこともあり、大部分の様相を確認することができなかった。しかし砕石が 60cm ほど堆積しており、その状況は申請地のほかの部分でも同様であると考えられる。

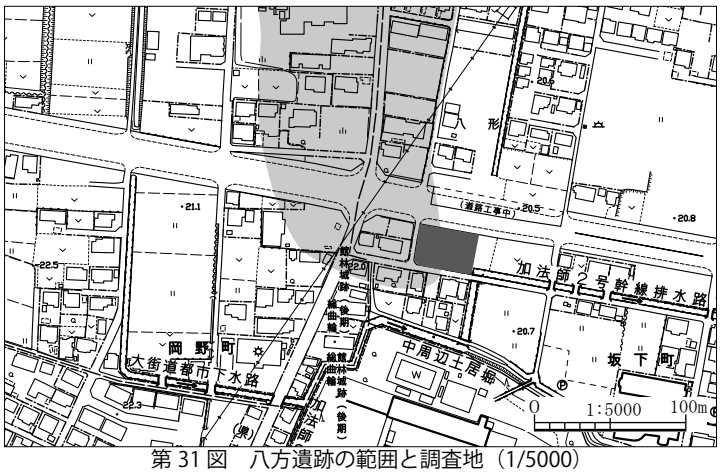
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第 30 図　出土遺物

８.八方遺跡（平 28 地点）

遺跡番号　0018
時代種別　古墳・奈良・平安（集落）
調 査 地　館林市坂下町字八形 3224－１、3225－１、3226、3227－１
調査原因　店舗
調査期間　平成 28 年 10 月 18 日
　　平成 28 年 11 月 7 日～ 11 月 13 日
調査面積　約 34 ㎡



第 31 図　八方遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（１）遺跡と周辺の環境

八方遺跡は館林市の中央部、邑楽・館林台地の北縁に位置し、古墳・奈良・平安時代と中近世の遺物が出土する。現況は住宅地と農地としての利用が主である。本遺跡は渡良瀬川の氾濫原となる沖積低地に面した馬の背状の舌状台地上に位置し、標高は約 21.5 ｍである。

同遺跡ではこれまでに 16 地点で調査が行われている。特に昭和 60 年度（Ｄ地点）と平成８年度（Ｊ地点）の調査では、古墳時代後期の竪穴式住居址と当該期の甕や坏が出土している。また中世遺物も城郭外の市内で最多である。

今回届出のあった土地は舌状台地の東端にあたり、旧矢場側流路を望む台地上であると考えられる。

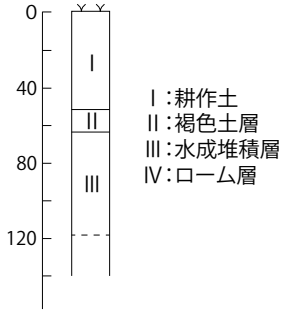
（２）調査の概要

工事予定地内で造成工事が行われた隙間に合わせて東西方向に１本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。なお、造成工事（10 月 18 日）の際に掘削された部分を仮にトレンチ２とし、土層断面の図面記録と写真記録を緊急的に残した。

（３）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅳ層である。調査地の現況は西から東へ傾斜している。

Ⅰ層は耕作土（層厚約 40cm）であるが、斜面地のため厚さにばらつきがある。Ⅱ層は褐色土層（褐色 7.5YR4/4）で水成堆積層との漸位層（層厚約 20cm）である。粘性・締まりはなく、植物の根なども多く含む。Ⅲ層は水成堆積層であり、粘性の有無で大きく２層にわけられる。層間にシルト層が部分的に堆積しており、互層となる。Ⅳ層はローム層で、締まり・粘性ともに強い。トレンチの東側で急激に落ち込んでおり湧水もあったため、西側のみでの確認となった。



第32図　基本層序

（４）確認された遺構

遺構は確認されなかった。トレンチの西側で不自然な落ち込みを確認したが、不定形で立ち上がりも判然とせず、出土遺物も縄文土器や土師器片などで流れ込みの可能性があったことから遺構でないと判断した。

（５）出土遺物

確認された遺物は縄文時代の土器片や土師器片など数点である。

（６）まとめ

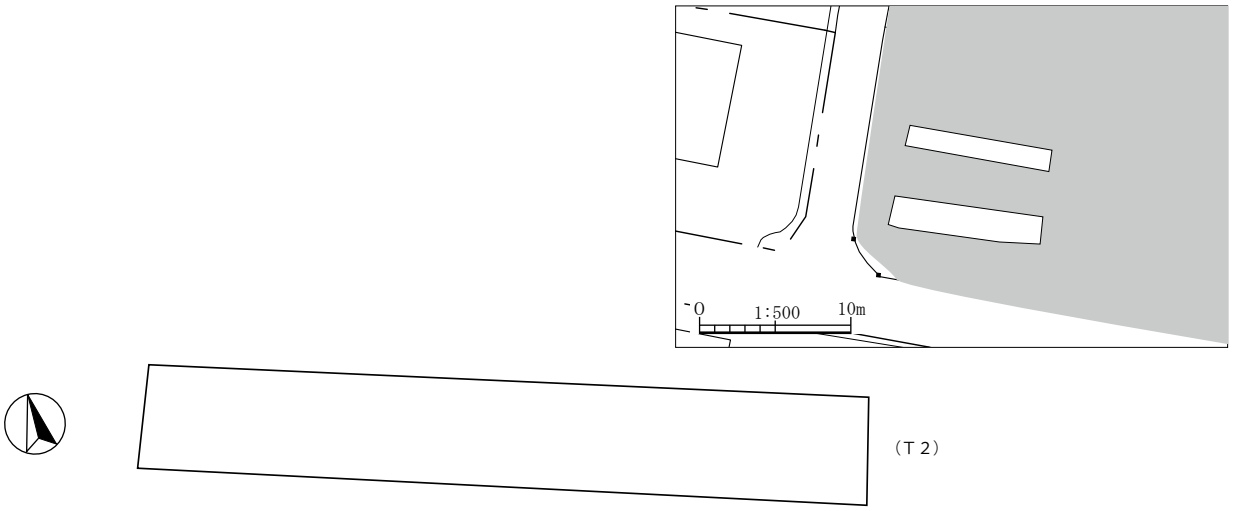
八方遺跡ではこれまでに 16 度の調査（Ａ～Ｊ、平 11・13・17 Ａ・17 Ｂ・18・23 地点）が行われている。特に、昭和 60 年度（Ｄ地点）と平成８年度（Ｊ地点）の調査では、今回の地点より北、舌状台地上で調査が行われており、多くの住居址が確認された。

本地点ではほとんど遺物は出土しなかった。しかし、今回の調査地は明治 17 年（1884）の『迅速測図』などから旧矢場側の流路の推定地である台地の崖線部にあたり、当初の推定通り旧河川に削られたと考えられる急激な台地の落ち込みを確認することができた。その状況はトレンチ２でも同様であり、急激な落ち込みを確認している。トレンチ２は擁壁設置のための掘削であり、落ち込み部以東は深掘していないため堆積状況は不明であるが、同様の堆積状況であると推察される。

水成堆積層がトレンチ１の中央部で膨らみ、台地の端部で急激に落ち込んでいた。その落ち込みに合わせ第２層が不自然な形で堆積している。トレンチ１の西端より５ｍの地点と東端の同一レベル（標高 19.53 ｍ）から湧水があったので、基盤層の起伏があると推察されるが、大部分でローム層まで確認できなかったため今後の検討課題である。

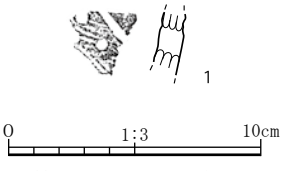
八方遺跡は河川を望む台地上に住居を展開する集落であり、その範囲の東端を伺うことができたといえる。中世陶磁器など、『館林市史　通史編 1』（2015）で指摘されている遺跡の盛衰を示すような資料は確認できな

かった。
　調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



Ⅰ　1　耕作土
Ⅱ　2　褐色 7.5YR4/4　粘性締まりなし、植物の根含む。漸位層
Ⅲ　3　黒褐色 10YR3/2　粘性締まりなし
　　4　黒褐色 7.5YR3/2　粘性ややあり、締まりあり
　　5　灰黄色 10YR6/2　粘性あり、締まりなし
　　6　鈍い黄褐色 10YR5/3　粘性あり、5 層より締まりあり。所々に褐色や赤みがかった部分あり。沈殿か
　　7　鈍い黄褐色 10YR5/3　粘性あり、6 層より褐色部分が多い
Ⅳ　8　明褐色 7.5YR5/6　粘性締まりややあり、シルト質。植物の根を含む。ローム層

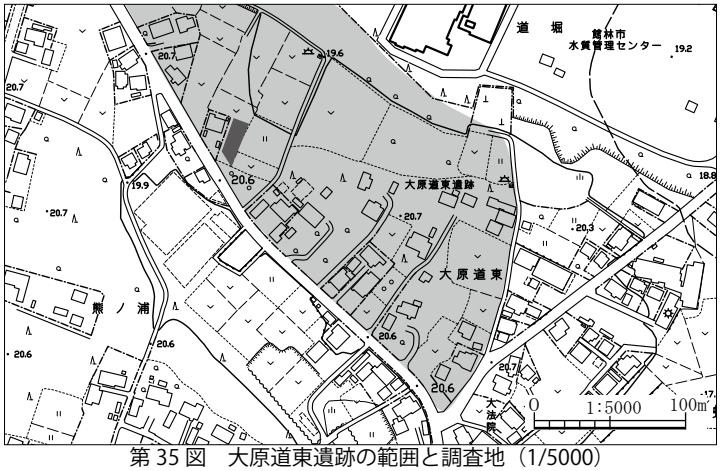
第 33 図　調査区位置と遺構配置



第 34 図　出土遺物

９．大原道東遺跡（平 28 地点）

遺跡番号　0110
時代種別　縄文（散布地）
調 査 地　館林市堀工町字大原道東 817- 1（現況は 817- ５）
調査原因　宅地造成
調査期間　平成 28 年 11 月 21 日～ 11 月 27 日
調査面積　約 82 ㎡



第 35 図　大原道東遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（1）遺跡と周辺の環境

大原道東遺跡は館林市の南、蛇沼の東で茂林寺沼の西に位置し、縄文時代後晩期の遺物を中心に出土する。現況は宅地化が進んではいるが農地も多く残る。本遺跡は邑楽・館林台地の南辺部で、湿地に挟まれた舌状台地上にあり、標高は約 19.5 ｍである。

同遺跡ではこれまでに昭和 56 年度に土地改良に伴い調査が行われ、袋状土坑などの遺構と、縄文時代後期・晩期の土器片や耳飾りなどの土製品、打製石斧・石剣などの石製品が確認された。

今回届出のあった土地は昭和 56 年度の地点より南西に位置する。

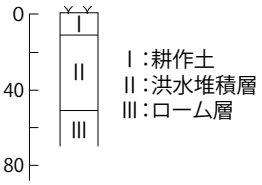
（2）調査の概要

工事予定区域の範囲とその地形に合わせ、北東～南西方向に１本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（3）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅲ層である。調査地の現況はほぼ平らであり、表層で多くの遺物が散見される。

Ⅰ層は耕作土（層厚約 15cm）である。所々ゴミを埋めた痕跡が残る。Ⅱ層は洪水堆積層（暗褐色 7.5YR3/3）で粘性・締まりともにない。下部にいくにつれ砂質が増し、ザラザラとした質感になる。遺物包含層であり、遺構の覆土もあるが、色調は判別しにくい。含水率が高く、湿っている。層厚約 40cm。Ⅲ層はローム層（褐色 10YR4/6）であり、粘性・締まりともにある。



第36図　基本層序

（4）確認された遺構

トレンチ内では住居址１軒、土坑４基、溝１条が確認された。

住居１は､約 3.6 ㎡の隅丸方形の住居址と想定されるが､調査区外であったため２辺の位置は確認できなかった。覆土中より第 38 図－５が出土しており、縄文時代後期の住居址と考えられる。

土坑１は西面セクションで確認でき、第５層を掘り込むような形であった。大形漏斗状透彫耳飾が出土したのもこの層中下部からであり、住居址などの可能性も考慮したが、耳飾りの下部から縄文時代後期の摩耗した土器片が出土したことから、洪水などによる撹拌の可能性もある。土坑２は、長方形で底部や立ち上がりが直線的であったため、時代の判別に不安が残るが、水成堆積層が上に堆積している点や、縄文時代後・晩期の遺物が覆土中より出土する点からこの時代のものとしたい。土壙の可能性もある。溝１は遺物の出土もなく、時期・性格ともに不明である。

（5）出土遺物

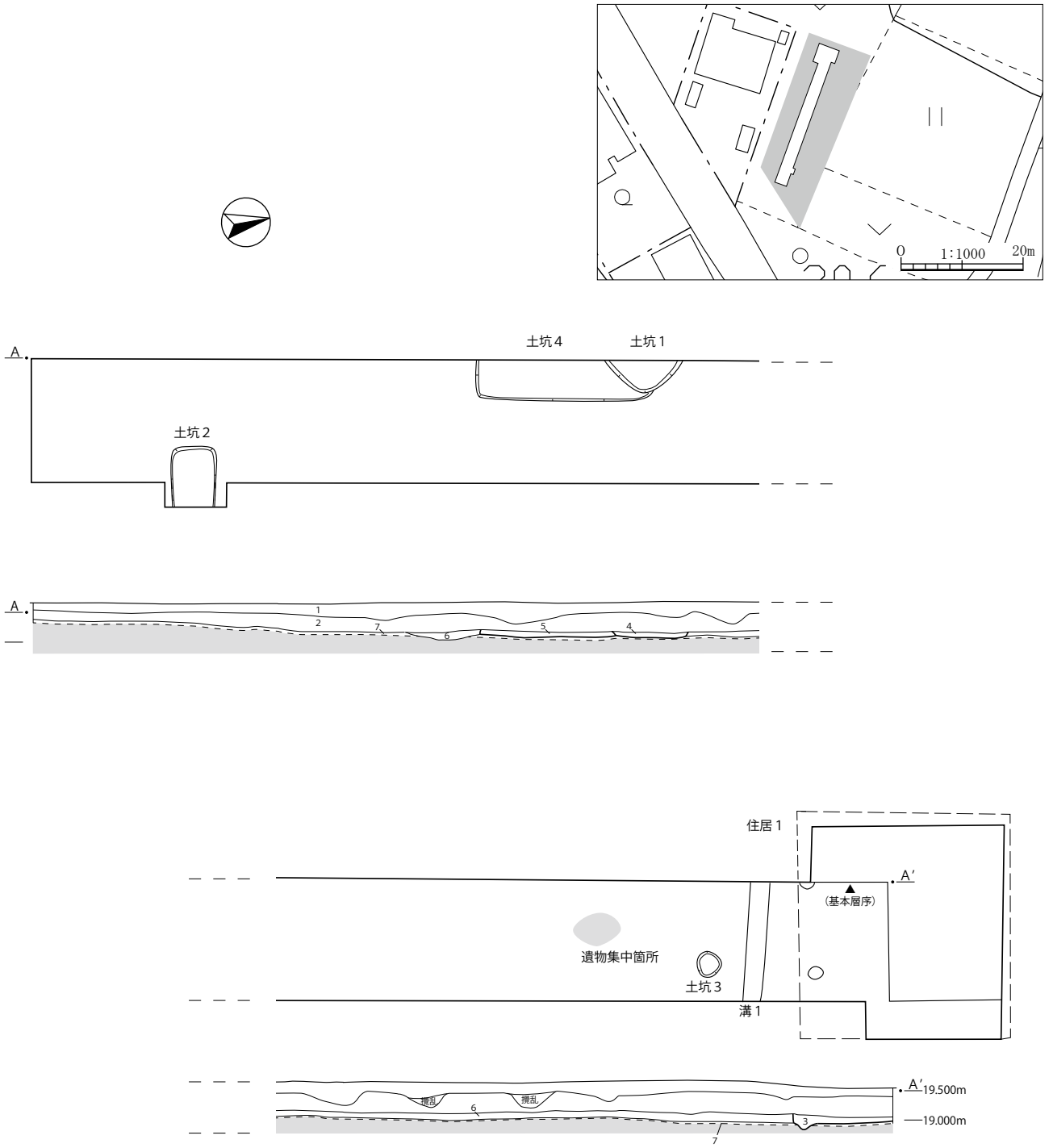
確認された遺物は縄文時代後期・晩期の土器が中心であるが、カワラケや近世陶磁器も出土した。特出されるのは、27 や 28 の耳飾りである。27 は透し彫りが施される漏斗状の耳飾りで、1/5 程度の残存率であったが、４単位に展開し復元した。ブリッジの形状は不明であるが、その端部がわずかに残る。以前の調査でも耳栓は出土しており、当遺跡が縄文時代晩期の豊富な遺物が出土することを示している。近接する市町村でも同様に低地に近い場所に遺跡の立地はみられ、１ｍほどの洪水堆積層に覆われ耳飾りなども多く出土した邑楽郡明和町の矢島遺跡や中空土偶が出土した邑楽郡板倉町の板倉遺跡など、当該期の遺跡との関連を考える必要がある。ほかにも縄文時代後期の安行２式土器や、口縁部が垂直に立ち上がるような折り返し口縁のある晩期安行式の粗製土器片も出土した。１や２など、表面が摩耗している土器も多く、元位置を留めているかは不明なものが多い。５は住居１から出土した口縁部片で、口縁部に２段 LR を施している。帯状の区画が明瞭なことから縄文時代後期の資料とみられる。7 は縄文時代後期の口縁部片である。LR を施文した後に磨り消しているが、磨り消しの下にＶ字状に下書き痕とみられる細い沈線が引かれている。14・16・20 は縄文時代晩期の粗製土器である。26 は注口土器の口縁部片であるが、形態は不明である。

（6）まとめ

大原道東遺跡では昭和 56 年度に土地改良に伴い確認調査が行われている。縄文時代後期・晩期の貴重な資

料が出土した。本地点では市内でほとんど確認されていない縄文時代後期の住居址を確認しただけでなく、大形漏斗状透彫耳飾も出土した。周辺の表面採集の結果、縄文時代中期の土器片なども確認でき、縄文時代後・晩期だけでなく、長期間にわたり痕跡が残されていることが改めて確認された。また周辺の踏査の結果、その分布範囲も現在の遺跡範囲よりさらに南に広がる可能性がある。

聞き取り調査でも、明治時代までは直接舟を出せるほど蛇沼が侵入してきていたとの話もあり、当時の景観

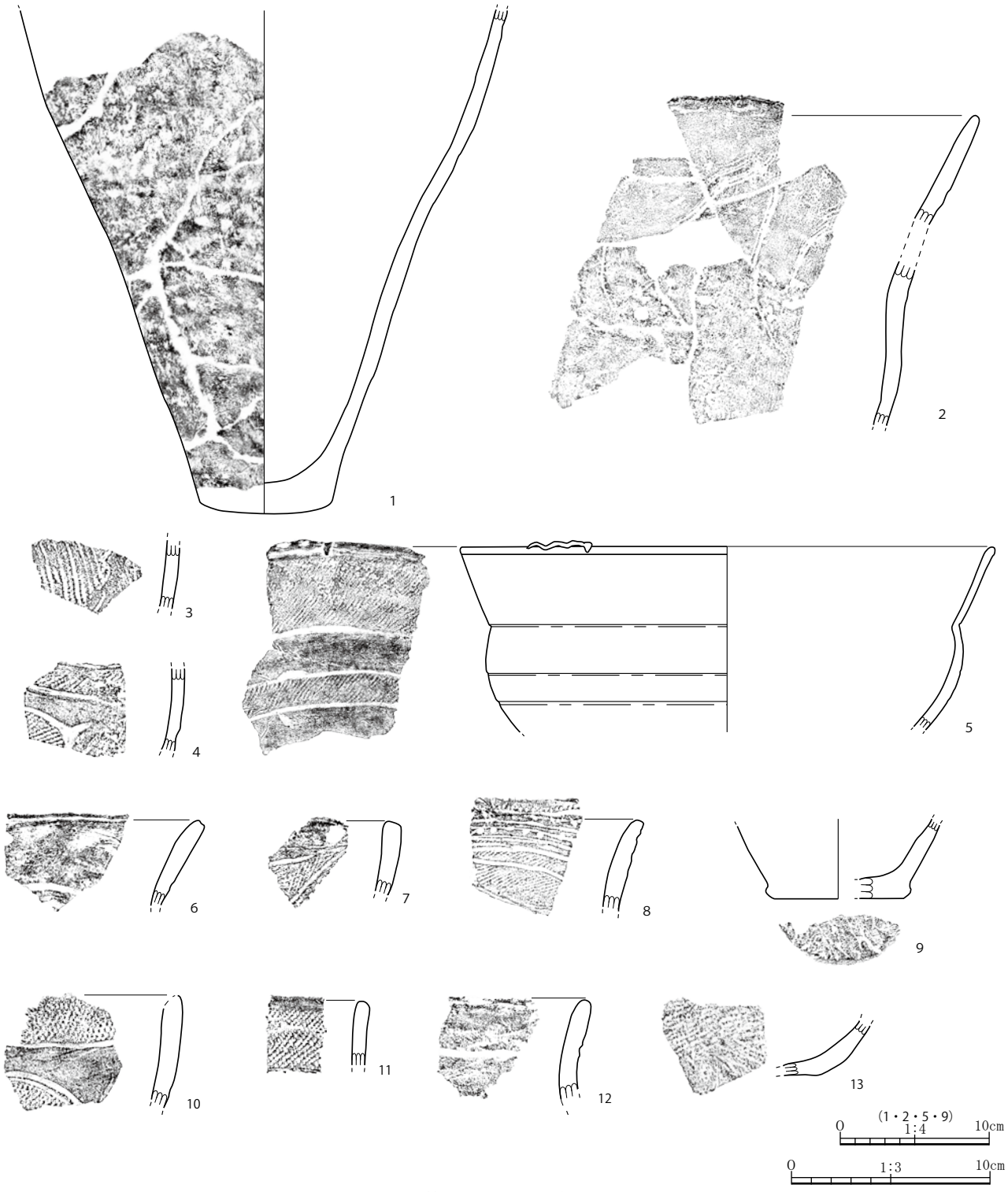


Ⅰ　1　耕作土
Ⅱ　2　暗褐色 7.5YR3/3　粘性締まりなし、湿り気あり、下部にいくにつれ砂質になる。水成堆積層（洪水層か）
Ⅱ　3　黒褐色 7.5YR2/2　粘性ややあり締まりなし、埋土
Ⅱ　4　暗褐色 7.5YR2/3　粘性あり締まりなし、ローム粒を少量含む。埋土
Ⅱ　5　黒褐色 7.5YR3/2　粘性あり締まりなし、ローム粒を少量含む。埋土
Ⅱ　6　極暗褐色 7.5YR2/3　粘性ややあり締まりなし。2層より砂質、洪水堆積層か
Ⅲ　7　褐色 10YR4/6　粘性締まりあり、ローム層

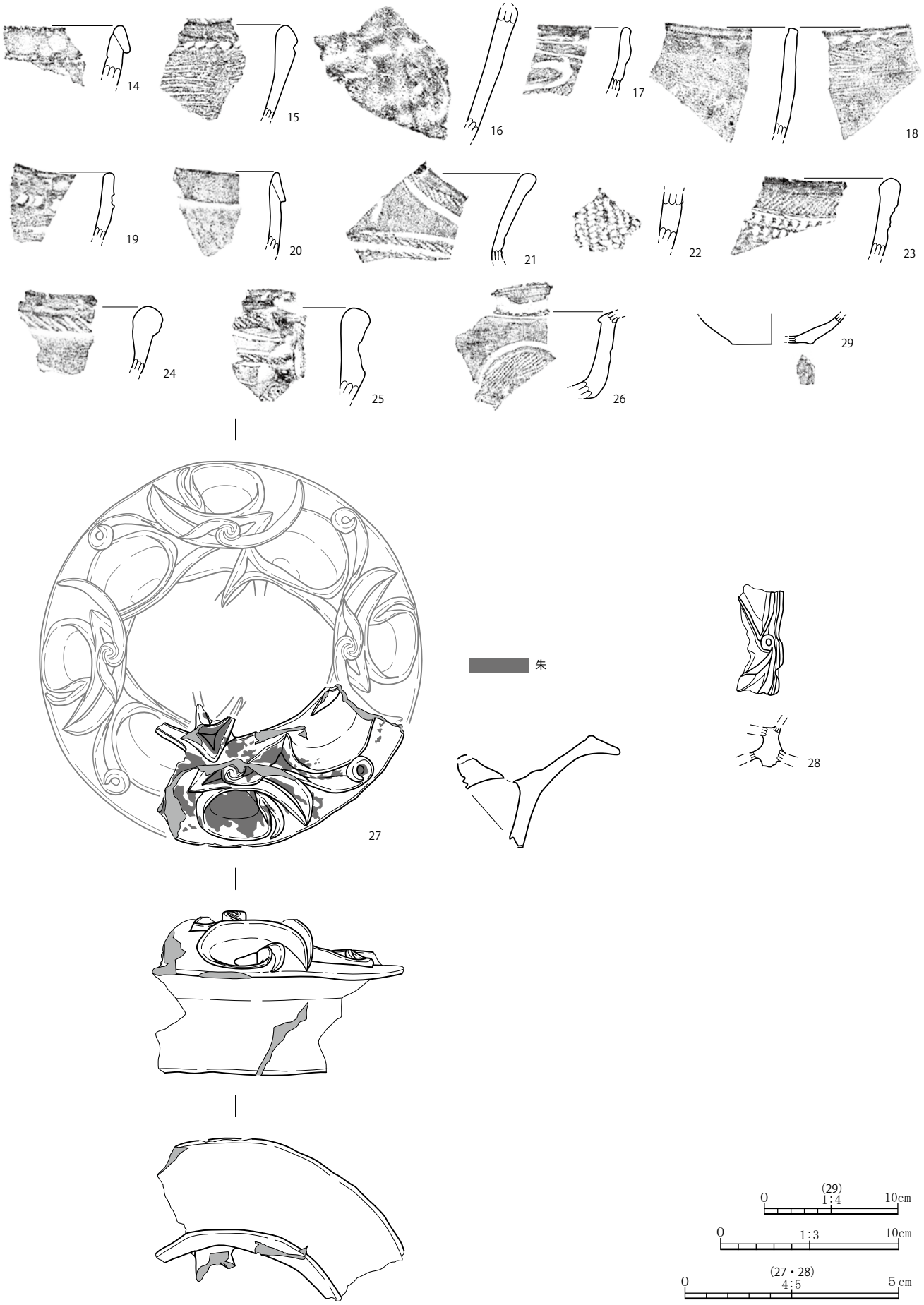
第 37 図　調査区位置と遺構配置

を考慮に入れ範囲の確認や調査を進めていく必要がある。また、明治 43 年の洪水では周辺が全て水没したとの話もあり、今回の堆積とも齟齬はない。洪水堆積層を年代ごとに区分することと、水流がどの程度遺物包含層を削るエネルギーがあるかを検討することは今後の課題である。

調査の結果、保存の対象となる遺構・遺物を確認したが、今回の対象地は駐車場になる予定であり、盛土も行うことから遺跡が保存されるものと判断した。



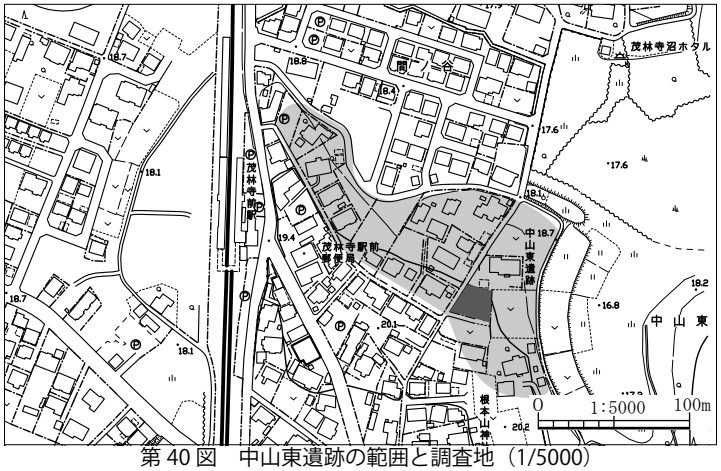
第 38 図　出土遺物


14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
29
朱
27
28
(29)
1:4
0
10cm
1:3
(27・28)
4:5
5cm

第 39 図　出土遺物

10. 中山東遺跡（平 28 地点）

遺跡番号　0103
時代種別　平安（散布地）
調 査 地　館林市堀工町字中山東 1617- ２、1617-10
調査原因　個人住宅
調査期間　平成 28 年 11 月 29 日
調査面積　約 17 ㎡



第 40 図　中山東遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（1）遺跡と周辺の環境

中山東遺跡は館林市の南、茂林寺沼の西に位置し、縄文・古墳時代の遺物が出土する。現況は住宅地と農地としての利用が主である。本遺跡は茂林寺沼を形成する開析谷南岸の台地東部に位置し、標高は約 19.9 ｍである。

同遺跡ではこれまでに２地点で調査が行われている。特に平成 14 年の調査では、縄文時代と平安時代の住居址が確認されたほか、同時期の遺物が出土している。

今回届出のあった土地は平 14 地点の南で隣接する地点である。

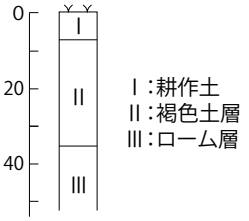
（2）調査の概要

工事予定区域で工事を実施していない部分に、東西方向に１本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（3）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅲ層である。調査地の現況はほぼ平らであり、表層に小礫などが散見される。

Ⅰ層は表土（層厚約 10cm）である。Ⅱ層は褐色土層（7.5YR4/3）で粘性・締まりともになく、含水率が高く水成堆積層と考えられる。層厚約 30cm。Ⅲ層はローム層（褐色 10YR4/4）であり、締まり・粘性ともに強いが、含水率が高い。

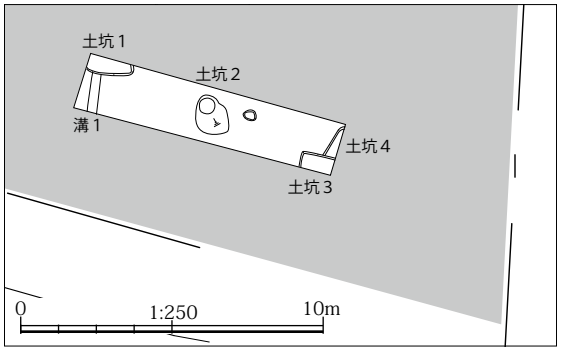


第41図　基本層序

（4）確認された遺構

トレンチ内では土坑４基と溝１条が確認された。性格･年代ともに不明である。

土坑１は溝１を切り込んでいる。土坑２は不定形であり、一部 30 ㎝ほど掘りこんでいることから柱穴の可能性があったが、礎石や対になる柱穴を確認できなかった。土坑３は硬化層があったため住居址の可能性もあったが、出土遺物も無く、拡張・確認できなかったため詳細は不明である。未調査ではあるが、施工業者の掘削に伴い土坑１基を確認した。径が２ｍほどある漏斗状の土坑であるが、遺物・礎石はなく、上部は耕作の攪乱を受けており詳細は不明である。



第 42 図　調査区位置

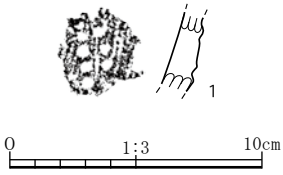
（5）出土遺物

縄文時代後期の土器片や、土師器片が出土した。

（6）まとめ

中山東遺跡ではこれまでに２度の調査が行われている。本地点ではほとんど遺物は出土しなかったが、土地の形成過程を考える上で重要となる堆積を確認した。湿り気があり、風成堆積ではあるが、堆積過程で水を被る状態か、水気のある場所に堆積したローム層であったと考えられ、そのような環境の中でも人々が暮らしを営んでいたことがわかる。

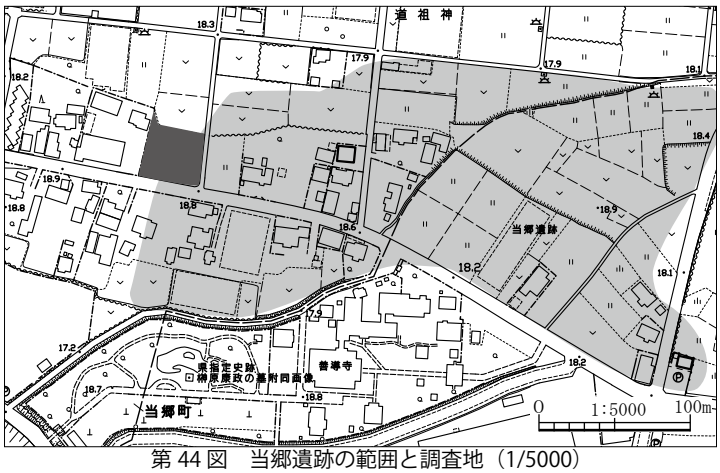
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第 43 図　出土遺物

11. 当郷遺跡（平 28 地点）

遺跡番号　0083
時代種別　古墳・奈良・平安（散布地）
調 査 地　館林市当郷町字道祖神 233
調査原因　その他開発（太陽光発電所）
調査期間　平成 28 年 12 月 11 日～ 12 月 18 日
調査面積　約 60 ㎡



第 44 図　当郷遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（1）遺跡と周辺の環境

当郷遺跡は館林市の東、城沼の北に位置し、古墳・奈良・平安時代の遺物が出土する。現況は住宅地と農地としての利用が主である。本遺跡は邑楽・館林台地の東端にあたり、城沼北岸の舌状台地に位置し、標高は約 18.1 ｍである。

同遺跡ではこれまでに２地点で調査が行われている。特に平成 25 年度は本発掘調査を実施し、当該期の土器と、複数の住居址が確認されている。

今回届出のあった土地は遺跡の西端付近に位置する地点である。

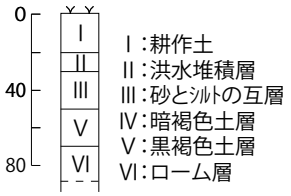
（2）調査の概要

工事予定区域の範囲とその地形に合わせ、南北方向に２本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（3）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅵ層である。

Ⅰ層は耕作土（層厚約 20cm）である。Ⅱ層は洪水堆積層（暗褐色 10YR3/3）である。下部の層と比べシルト質でも砂質でもなく、固く締まっている。北にいくにつれて厚く堆積する。Ⅲ層は砂とシルトの互層（灰黄褐色）であり、全体的に南から北へ傾斜している。雲母片を含むことと立地から渡良瀬川の影響を受けた堆積物であると考えられる。Ⅳ層は暗褐色土層（10YR3/3）で、黒褐色土層との漸位層（層厚約 30cm）であり、ややシルト質で粘性はなく、締まりは強い。Ⅴ層は黒褐色土層（7.5YR3/1）で、粘性はなく、締まりは強いが、粒子は細かい。Ⅵ層はローム層（暗褐色 10YR3/4）で、粘性･締まりともに強いが、含水率が高く湿っている。



第45図　基本層序

（4）確認された遺構

重機による攪乱が２か所確認できた。地権者に重機を使用した覚えはないため時期は不明である。

（5）出土遺物

確認された遺物は陶磁器片もあったが、土師器片・須恵器片など当郷遺跡の過去の調査と同時期の遺物が中心であった。１はいわゆる国分式の坏であり、平 25 地点でも同様の坏が出土していたが、底部糸切り痕周縁のナデはない。第３層と第４層の境から逆位で出土した（第 48 図）。

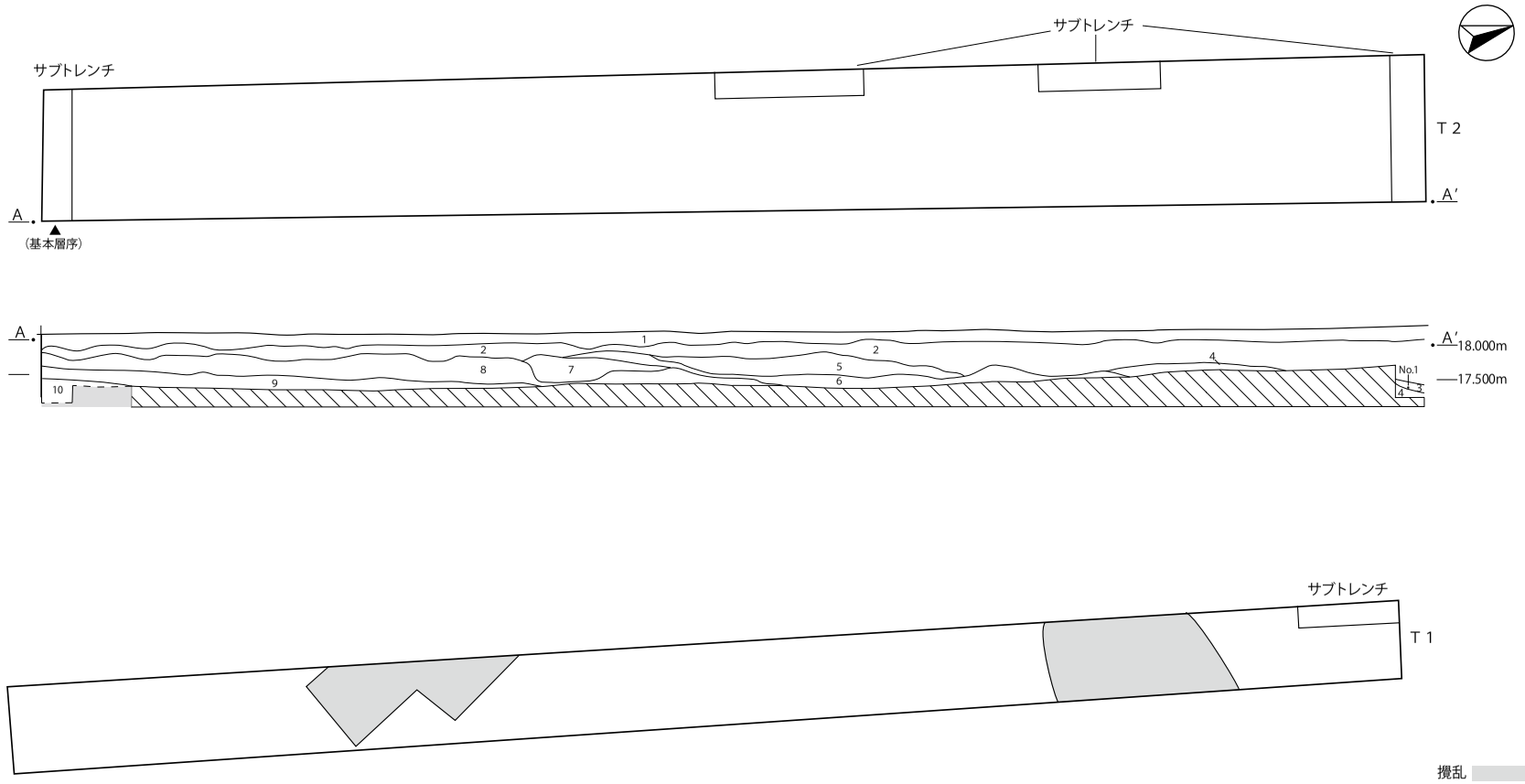
（6）まとめ

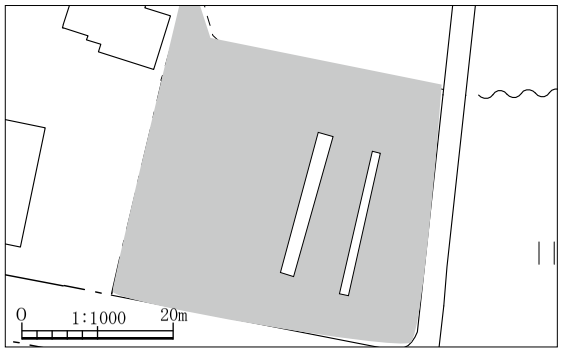
当郷遺跡では今回の調査も含め、これまでに３度の調査が行われている。特に、平成 25 年度に確認調査と本発掘調査を行った平 25 地点では、城沼から張り出した舌状台地上に大規模な集落が営まれていることが確認された。報告書では洪水堆積層で住居址が埋没していると想定していたが、その後、古墳時代後期の渡良瀬川の流路（旧矢場側）と自然堤防の位置関係から、台地の上の住居を埋没させるほど洪水の影響はなかったのではないかという指摘を受けていた。

今回の調査で出土した第 48 図－１は砂とシルトの互層に挟まる形で出土しており、周囲の状況から流れ込みであると考えられるが、少なくとも当該期以前にこれだけの砂を堆積させるような環境があったことを示している。

澤口宏氏の現場確認での所見では、小礫などがないことから流路ではないが、班鉄もⅢ層で確認できることから、何度も水位の上下がある環境を想定していた。

第 47 図は明治 44 年（1911）に刊行された『明治四十三年群馬縣邑樂郡水害誌』の挿図である。明治 43 年の洪水被害を図化したものであり、堤防の決壊箇所や、氾濫状況を示している。邑楽郡板倉町や館林市の早川田付近で決壊しているが、特筆されるのはその氾濫区域であり、市街地周辺を除くほとんどの市域で氾濫の影響を受けている点である。Ⅱ層が固く締まっていたが、邑楽郡板倉町などの洪水堆積の特徴の１つであるといわれており、ロームを含み粘土質の土は固く、耕作機の刃を駄目にしてしまうという。1947（昭和 22）年のカ





I　1　耕作土
II　2　暗褐色 10YR3/3　粘性なし締まり強い
II　3　黒褐色 7.5YR3/1　粘性締まりややあり、砂を少し含む（雲母）、漸位層
III　4　黄褐色 2.5YR4/6　粘性なし締まり強い、斑鉄あり、ややざらつく、シルト層
III　5　オリーブ褐色 2.5YR4/3　粘性締まりなし、細砂層
III　6　オリーブ褐色 2.5YR4/3　粘性締まりなし、雲母を多く含む、川砂のようなざらつきあり、砂層
III　7　褐色 7.5YR4/4　5層より土混じり、雲母含む
III　8　灰黄褐色 10YR5/2　粘性なし締まりややあり、やや砂を含む（雲母あり）、斑鉄あり、砂質シルト層
V　9　黒褐色 7.5YR3/1　粘性なし締まりややあり、細かい粒子
VI　10　暗褐色 10YR3/4　粘性あり締まりややあり、湿り気ありローム層

0　1:100　5m

第 46 図　調査区位置と遺構配置

スリーン台風の際は、板倉町方面から洪水が押し寄せてきて腰まで浸かったとの話もあることから、今後も自然災害の影響や流路の変遷を大規模かつ詳細に捉えていく必要がある。

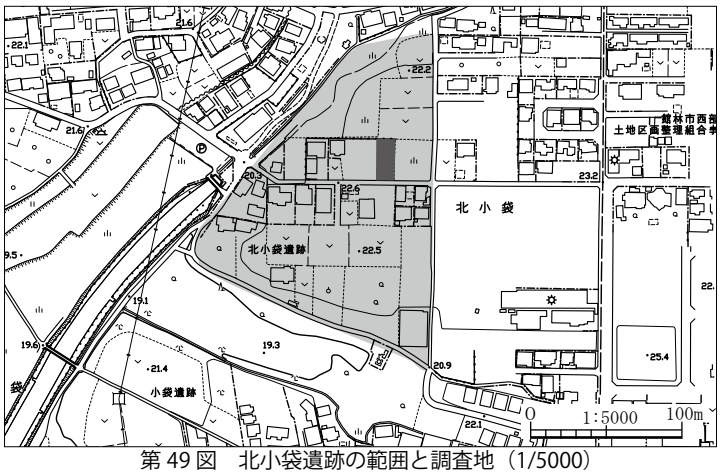
調査の結果、保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。

第 47 図　邑樂郡水害略圖 (『明治四十三年群馬縣邑樂郡水害誌』より転載)

第 48 図　出土遺物

12. 北小袋遺跡（平 28 Ｂ地点）

遺跡番号　0054
時代種別　縄文（散布地）
調 査 地　館林市近藤町字北小袋 171-171
調査原因　個人住宅
調査期間　平成 28 年 12 月 20 日～ 12 月 25 日
調査面積　約 30 ㎡



第 49 図　北小袋遺跡の範囲と調査地（1/5000）

（1）遺跡と周辺の環境

北小袋遺跡は館林市の南西、近藤沼の北に位置し、旧石器・縄文時代の遺物が出土する。現況は住宅地と農地としての利用が主である。本遺跡は近藤沼から延びる大きな谷が樹支状の支谷に分かれる舌状台地上に位置し、標高は約 22.4 ｍである。

同遺跡ではこれまでに４地点で調査が行われている（平 28 Ａ地点を除く）。特に昭和 61 年度の調査では、旧石器時代の石器と縄文時代早期・前期の土器片が出土している。

今回届出のあった土地は遺跡の東端付近に位置し、崖線部から上がり平らな台地が広がる地点である。

（2）調査の概要

工事予定区域の範囲とその地形に合わせ、南北方向に１本のトレンチを設定し、土木重機により表土を排除した。その後、土層断面を観察しつつ人力で掘り下げ、遺構・遺物の有無、土中の状態を精査した。

（3）基本層序

本遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅴ層である。平 28 Ａ地点の西側にあたり、40㎝ほど盛土がされている。Ⅱ層は確認できなかったが、平 28 Ａ地点と同様である。

（4）確認された遺構

遺構は確認されなかった。

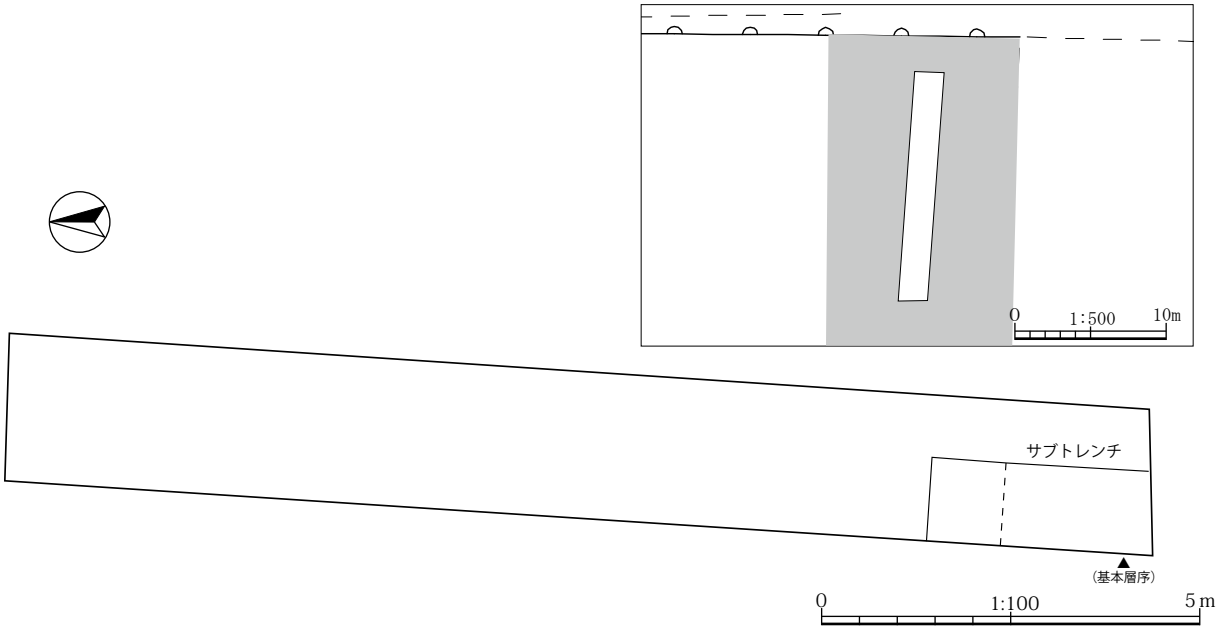
（5）出土遺物

近現代の陶磁器数点が耕作土中から出土した。また上部ローム層中から石片が出土したが、明確な加工痕は認められなかった。

（6）まとめ

トレンチ内で遺構は確認されなかった。平 28 Ａ地点と同様にほとんど遺物は出土しなかったが、同レベルで暗色帯を確認でき、ローム層もほぼ水平に堆積しており、さらに西で谷へと急激に落ち込むことが想定される。耕作土より下の堆積状況は良好であり、今後旧石器時代の資料を層位的に確認できる可能性がある。

保存を要する遺構・遺物を確認できなかったことから、開発による埋蔵文化財への影響はないものと判断した。



第 50 図　調査区位置と遺構配置

遺跡名	図版番号	出土地点	種類／器種	時代	調整の特徴、残存率など	備考
笹原遺跡	6－1	溝1	在地系土器 内耳鍋	中世	口縁部片、内面有段	
下遺跡	10－1	土坑8	深鉢	縄文	口縁部片、単軸絡条体にR2条を網目状に交差か	前期前半
	10－2	トレンチ覆土	深鉢	縄文	胴部片、横位にRLのループ文を施す	関山式
	10－3	トレンチ覆土	深鉢	縄文	胴部片、横位にRを施す	黒浜式
	10－4	トレンチ北壁	土師器 坏	6c～7c	4/5残存	
	10－5	トレンチ覆土	土師器 坏	6c～7c	口縁部片	
	10－6	トレンチ覆土	土師器 坏	6c～7c	口縁部片	
	10－7	トレンチ覆土	土師器 坏	6c～7c	口縁部片	
	10－8	トレンチ覆土	土師器 坏	6c～7c	口縁部片	
	10－9	トレンチ覆土	土師器 坏	6c～7c	口縁部片	
	10－10	トレンチ覆土	土師器 甕	6c～7c	口縁部片	
	10－11	トレンチ覆土	カワラケ	近世	底部片、回転糸切痕	
	10－12	土坑2	カワラケ	近世	1/2残存	
	10－13	トレンチ覆土	陶磁器 すり鉢	近世	丹波か	
	10－14	トレンチ覆土	陶磁器	近世	灯明具か	
	10－15	トレンチ表採	陶磁器 徳利	近現代	完形	
咄戸沼遺跡	14－1	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、、粗く撚ったLを縦位に施す。繊維の方向が条に対して垂直に表出する。21・22と同一個体か	後期か
	14－2	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、LRにLの付加条縄文を施す	
	14－3	T1土坑4	深鉢	縄文	口縁部～胴部片、LRを施す	加曽利E2式
	14－4	T2土坑5	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	中期
	14－5	T2土坑5	深鉢	縄文	口縁部片、LRを施す	称名寺式
	14－6	T1土坑4	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	称名寺式
	14－7	T2土坑6	深鉢	縄文	口縁部片、LRを施す	称名寺式
	14－8	T2土坑5	深鉢	縄文	胴部片、LRを施し沈線	称名寺式
	14－9	T1土坑4	深鉢	縄文	口縁部片、LRを充填施文	称名寺式
	14－10	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	称名寺式
	14－11	T2土坑5	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	称名寺式
	14－12	T1土坑4	深鉢	縄文	口縁部装飾	称名寺式
	14－13	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	後期初頭
	14－14	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片	後期初頭
	14－15	T1土坑4	深鉢	縄文	胴部片	後期初頭
	14－16	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	後期初頭
	15－17	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	後期初頭
	15－18	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	後期初頭
	15－19	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	後期初頭
	15－20	T1土坑4	深鉢	縄文	口縁部片、棒状工具による連続刺突	後期
	15－21	T2土坑5	深鉢	縄文	胴部片、粗く撚ったLを縦位に施す。繊維の方向が条に対して垂直に表出する	後期か
	15－22	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、粗く撚ったLを縦位に施す。繊維の方向が条に対して垂直に表出する	後期か
	15－23	T2土坑6	深鉢	縄文	胴部片、LRを施す	後期か
	15－24	T2土坑6	深鉢	縄文	口縁部片、竹管状工具による連続刺突	晩期か
	15－25	T2土坑5	深鉢	縄文	底部片、網代痕	
	15－26	T1土坑4	カワラケ	近世	4/5残存	
	15－27	トレンチ覆土	灯火皿	近世		
	15－28	T1土坑4	陶磁器 碗	中世志野皿	口縁部片	
	15－29	T1土坑4	陶磁器 すり鉢	近世	口縁部片、指痕あり	
	15－30	T1土坑2	陶磁器 灯火受皿	近世		
	15－31	T1土坑4	陶磁器 碗	近世	底部～口縁部片	肥前系か
	15－32	T1土坑4	陶磁器 香炉	近世	底部～口縁部片	瀬戸美濃
	15－33	T1土坑4	陶磁器 小碗	近世	ほぼ完形	瀬戸美濃
	15－34	T1土坑4	陶磁器 碗	近世	底部～口縁部片	肥前系
	15－35	T1土坑4	陶磁器 青磁染付	近世	底部片、雪輪草（梅）花文、高台に崩れた銘あり	肥前系
	15－36	T1土坑4	陶磁器 青磁染付	近世	底部片	肥前系

遺跡名	図版番号	出土地点	種類／器種	時代	調整の特徴、残存率など	備考
咄戸沼遺跡	15 － 37	Ｔ１土坑４	陶磁器 碗	近世	底部～口縁部片、氷裂字に菊花文	
	15 － 38	Ｔ１土坑４	陶磁器 腰錆茶碗	近世	底部	
	15 － 39	Ｔ１土坑４	陶磁器 小杉茶碗	近世	口縁部片	
	15 － 40	Ｔ１土坑４	陶磁器 仏花瓶	近世	底部～胴部片、4/5 残存	
	15 － 41	Ｔ１土坑４	陶磁器 有耳壷	近世	口縁部片	瀬戸美濃
	15 － 42	Ｔ１土坑４	陶磁器 半胴か	近世後半	口縁部片	瀬戸美濃
	15 － 43	Ｔ１土坑４	陶磁器 汁次か	近世	底部片	瀬戸美濃
	15 － 44	Ｔ１土坑４	陶磁器 秉燭	近世	完形	瀬戸美濃
	15 － 45	Ｔ２土坑６	陶磁器 碗	近現代	口縁部片	
	15 － 46	Ｔ１土坑４	焙烙	近世	内耳あり	
	15 － 47	Ｔ１土坑４	焙烙	近世	内耳あり	
	15 － 48	Ｔ１土坑４	焙烙	近世	内耳あり	
	15 － 49	Ｔ１土坑４	焙烙	近世		
	15 － 50	Ｔ１土坑４	丸瓦	近世		
	15 － 51	Ｔ１土坑４	銭	近世	寛永通宝	
法正谷遺跡	26 － 1	Ｔ２東端性格不明遺構	深鉢	縄文	底部片	前期
	26 － 2	Ｔ１、８層	深鉢	縄文	胴部片、RL のループ文を施す	前期
	26 － 3	Ｔ２東側	深鉢	縄文	胴部片、RL のループ文を施す	前期
	26 － 4	Ｔ２東端性格不明遺構	深鉢	縄文	胴部片、RL のループ文を施す	前期
	26 － 5	Ｔ１、８層	深鉢	縄文	胴部片、LR を施す	前期
	26 － 6	Ｔ２東端性格不明遺構	深鉢	縄文	胴部片、羽状に LR を施す	前期
	26 － 7	Ｔ１、８層	深鉢	縄文	胴部片、LR を施す	前期
	26 － 8	Ｔ１、８層	深鉢	縄文	胴部片、L を施す	前期
大原道東遺跡	38 － 1	遺物集中箇所	深鉢	縄文	底部～胴部片、3/5 残存	後期
	38 － 2	土坑１他	深鉢	縄文	口縁部～胴部片、1/5 残存	後期
	38 － 3	土坑１	深鉢	縄文	胴部片、RL を横位に施文す	後期
	38 － 4	土坑１	深鉢	縄文	LR 施文後に沈線を引き、磨消	晩期初頭
	38 － 5	住１	深鉢	縄文	口縁部～胴部片、口縁部には LR を２段施す。胴部に沈線を引き明瞭に区画	後期末
	38 － 6	住１床	深鉢	縄文	口縁部片、口唇部に沈線を施す	後期
	38 － 7	土坑２	深鉢	縄文	口縁部片、LR を施し磨消。下書き痕か	後期
	38 － 8	トレンチ	深鉢	縄文	口縁部片。LR を施し沈線。内面口唇部に連続する刺突	後期
	38 － 9	遺物集中一括	深鉢	縄文	底部～胴部片、葉脈痕	後期
	38 － 10	トレンチ	深鉢	縄文	胴部片、LR を施し沈線、磨消し	後期末
	38 － 11	トレンチ	深鉢	縄文	口縁部片、口縁部まで LR を施す	後期末
	38 － 12	トレンチ	深鉢	縄文	口縁部片	後期末
	38 － 13	トレンチ	深鉢	縄文	底部片、LR を施す	後期末
	39 － 14	土坑２	深鉢	縄文	口縁部片、粗製土器	晩期初頭
	39 － 15	トレンチ	深鉢	縄文	口縁部片、ヘラ状工具による連続刺突	晩期初頭
	39 － 16	遺物集中一括	深鉢	縄文	口縁部片。粗製土器	晩期初頭
	39 － 17	トレンチ	深鉢	縄文	口縁部片	後・晩期
	39 － 18	トレンチ	深鉢	縄文	口縁部片、口唇部内外に摘み痕あり	後・晩期
	39 － 19	トレンチ	深鉢	縄文	口縁部片。半截竹管状工具による刺突。	後・晩期
	39 － 20	トレンチ覆土	深鉢	縄文	口縁部片、粗製土器	晩期初頭
	39 － 21	トレンチ	深鉢	縄文	口縁部片、RL を施し沈線、磨消し	晩期
	39 － 22	表採	深鉢	縄文	胴部片、RL を施す	中期
	39 － 23	表採	深鉢	縄文	口縁部片、LR を施す。棒状工具により２列の連続刺突	後期末
	39 － 24	表採	深鉢	縄文	口縁部片、口唇部にヘラ状工具による刻み	後期末
	39 － 25	表採	深鉢	縄文	口縁部片、内面口唇部に刻み、RL を施す	晩期
	39 － 26	土坑１	注口土器	縄文	口縁部片、LR を施す、丁寧にナデ	後期
	39 － 27	土坑１	耳飾り	縄文	大形漏斗状透彫耳飾	晩期
	39 － 28	土坑２	耳飾り	縄文	透彫耳飾	晩期
	39 － 29	トレンチ覆土	カワラケ	近世	底部片、回転糸切痕。板状工具による圧痕	
中山東遺跡	43 － 1	土坑１	深鉢	縄文	胴部片、地紋 LR に列点２列	後期
当郷遺跡	48 － 1	Ｔ２遺物集中箇所	土師器坏	9c	4/5 残存、回転糸切痕	
	48 － 2	表採	須恵器	古墳	胴部片、内面青海波文	
	48 － 3	表採	土師器 甕	古墳	胴部片、ヘラケズリ	
	48 － 4	Ｔ２北 ST 覆土	陶磁器	近世	底部片	

写　真　図　版

笹原遺跡 (平 27 地点)

1 調査区全景

3 溝 1 精査前 (南から)

2 精査前 (西から)

5 精査後 (西から)

4 溝 1 精査後 (南から)

6 溝 2 土層断面 (北面)

1 精査前 (西から)

2 精査後 (西から)

3 土層断面西端 (北面)

4 土層断面東端 (北面)

5 土木重機による埋戻し

6 調査完了

1 土木重機による掘削

2 トレンチ 1 精査前 (北から)

3 トレンチ 1 精査後 (北から)

4 トレンチ 2 精査後 (北から)

5 トレンチ 1 土坑 4 遺物集中箇所

6 トレンチ 1 土坑 4 精査後

1 調査地全景

2 土木重機による掘削

3 トレンチ 2 精査前 (東から)

4 トレンチ 2 精査後 (西から)

5 トレンチ 2 深掘部 (北から)

6 トレンチ 2 土坑 2 精査後 (北から)

萩原遺跡 (平 28 地点)

1 調査地全景

2 精査前 (西から)

3 土坑 2 精査後 (南から)

5 精査後 (西から)

4 性格不明遺構 1 (南から)

6 土坑 3 精査後 (北から)

7 人力による埋戻し

1 調査地全景

2 土木重機による掘削

3 トレンチ 2 精査前 (西から)

5 トレンチ 1 精査後 (西から)

6 トレンチ 2 精査後 (西から)

4 トレンチ 2 土坑 1 精査前 (東から)

7 トレンチ 1 土層断面 (西面)

1 調査地全景

2 土木重機による掘削

3 精査前 (南から)

4 精査後 (南から)

5 土層断面 1 (西面)

6 土層断面 2 (西面)

八方遺跡 (平 28 地点)

1 調査地全景

2 土木重機による掘削

3 トレンチ 2 土層断面 (南面)

5 トレンチ 1 精査後 (東から)

4 トレンチ 1 土層断面 (南面)

6 トレンチ 1 土層断面東端 (南面)

7 トレンチ 1 土層断面 (北面)

大原道東遺跡 (平 28 地点)

1 調査地全景

2 土木重機による掘削

3 精査前 (南から)

4 土坑 1 遺物出土状況 (東から)

5 大形漏斗状透彫耳飾出土状況

6 遺物集中箇所 (東から)

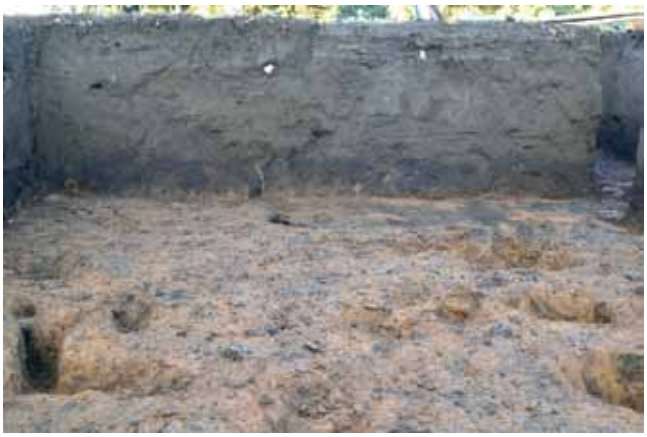
7 遺物集中箇所精査後

8 精査後 (南から)

9 土坑２精査後 (西から)

10 土坑２拡張 (西から)

11 住居１土層断面 (西面)



12 住居１土層断面 (北面)

13 土層断面 (西面)

14 調査完了

1 トレンチ外土坑断面

2 精査前 (西から)

3 溝 1 精査後 (南から)

5 精査後 (西から)

4 土坑 3 精査後 (北から)

6 土木重機による埋戻し

7 調査完了

1 調査地全景

2 土木重機による掘削

3 トレンチ 1 精査前 (北 から)

4 トレンチ 2 精査前 (北から)

5 トレンチ 1 精査後 (北から)

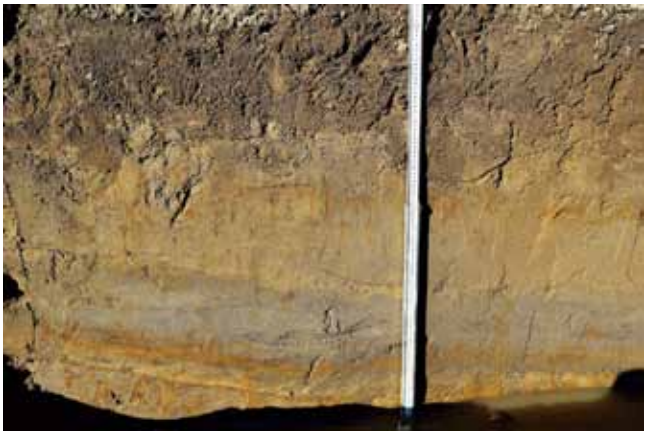
6 トレンチ 1 攪乱部 (南から)

7 トレンチ２精査後 (北から)

8 トレンチ２遺物集中箇所 (東から)

9 トレンチ２遺物出土状況 (東から)

10 トレンチ２土層断面 (西面)



11 トレンチ２砂層堆積状況 (西面)

12 土木重機による埋戻し

13 調査完了

1 調査地全景

2 土木重機による掘削

3 精査後 (北から)

4 土層断面 (南面)

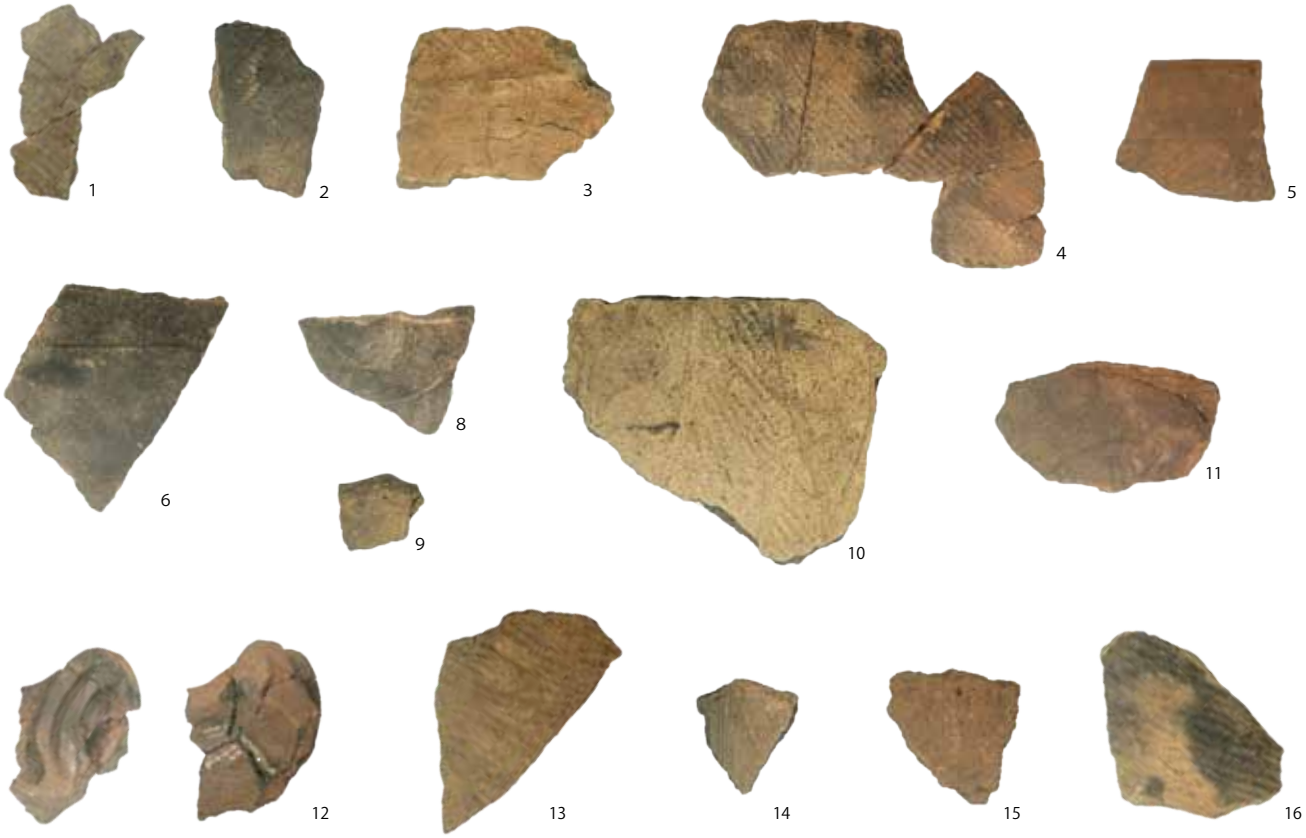
5 発掘作業風景

6 調査完了

笹原遺跡

下遺跡

咄戸沼遺跡



17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

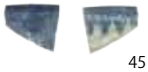
40

41

42

43

44


45

46

47

48

50

49

51

萩原遺跡

1

2

法正谷遺跡

1

2

3

4

5

6

7

8

高根古墳群

1

八方遺跡

1

大原道東遺跡

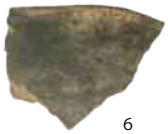
1

2

3

4

5


6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

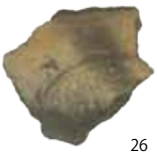
21

22

23

24

25


26

29

27

28

当郷遺跡

1

2

3

4

中山東遺跡

1

抄　　録

ふ　り　が　な	たてばやししないいせきはっくつちょうさほうこくしょ		
書　　名	館林市内遺跡発掘調査報告書		
副　書　名	平成27・28年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査	巻　次	
シ　リ　ー　ズ　名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書	シリーズ番号	第54集
編　集　者　名	宮田　圭祐	編 集 機 関	館林市教育委員会
編 集 機 関 所 在 地	〒374-8501　群馬県館林市城町１番１号　TEL 0276-74-4111　FAX 0276-74-4113		
発　行　年　月　日	2017(平成29)年３月31日		
市 町 村 コ ー ド	102075		

所収遺跡	所在地	遺跡番号	緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
笹原遺跡(平27地点)	堀工町字笹原1873-２	101	36° 13′ 47″	139° 31′ 45″	20160118～20160121	約24㎡	個人住宅
下遺跡(平27地点)	日向町字下249-６	002	36° 16′ 34″	139° 30′ 36″	20160226～20160301	約24㎡	その他建物
咄戸沼遺跡(平27地点)	堀工町字熊野浦741-４	109	36° 13′ 35″	139° 32′ 18″	20160318～20160326	約33㎡	個人住宅
北小袋遺跡(平28Ａ地点)	近藤町字北小袋171-60	054	36° 14′ 17″	139° 30′ 38″	20160426～20160506	約107㎡	個人住宅
萩原遺跡(平28地点)	苗木町字萩原1806-10	098	36° 13′ 44″	139° 30′ 49″	20160714～20160726	約42.2㎡	個人住宅
法正谷遺跡(平28地点)	堀工町字法正谷1746-１、1746-３	102	36° 13′ 36″	139° 31′ 49″	20160926～20161005	約43.2㎡	集合住宅
高根古墳群(平28地点)	高根町字寺内130-３、130-６～９	010	36° 15′ 58″	139° 31′ 11″	20161025～20161026	約９㎡	個人住宅
八方遺跡(平28地点)	坂下町字八形3224-１、3225-１、3226、3227-１	018	36° 15′ 25″	139° 31′ 58″	20161107～20161113	約34㎡	店舗
大原道東遺跡(平28地点)	堀工町字大原道東817-１(現況は817-５)	110	36° 13′ 42″	139° 32′ 19″	20161121～20161127	約82㎡	宅地造成
中山東遺跡(平28地点)	堀工町字中山東1617-２、1617-10	103	36° 13′ 31″	139° 31′ 44″	20161129	約17㎡	個人住宅
当郷遺跡(平28地点)	当郷町字道祖神233	083	36° 14′ 40″	139° 34′ 00″	20161211～20161218	約60㎡	その他開発
北小袋遺跡(平28Ｂ地点)	近藤町字北小袋171-171	054	36° 14′ 17″	139° 30′ 37″	20161220～20161225	約30㎡	個人住宅

遺跡名	種　別	時　代	主な遺構	主な遺物	特記事項
笹原遺跡	散布地	縄文・平安	土坑２、溝２	内耳鍋、カワラケ	
下遺跡	散布地	古墳・平安	土坑９、溝２	縄文土器、坏、カワラケ	
咄戸沼遺跡	散布地	縄文	土坑６、溝１	縄文土器、近世陶磁器、焙烙、銭、貝殻	
北小袋遺跡	散布地	縄文	土坑６	縄文土器、土師器	
萩原遺跡	散布地	縄文・平安	土坑４、性格不明遺構３	近世陶磁器	
法正谷遺跡	散布地	平安	溝１、性格不明遺構２	縄文土器	
高根古墳群	古墳	古墳	—	カワラケ	
八方遺跡	集落	古墳・奈良・平安	—	縄文土器、土師器	
大原道東遺跡	散布地	縄文	住居址(縄文後期)、土坑４、溝１	縄文土器、カワラケ、近世陶磁器	大形漏斗状透彫耳飾
中山東遺跡	散布地	平安	土坑４、溝１	縄文土器、土師器	
当郷遺跡	散布地	古墳・奈良・平安	—	坏、須恵器、甕、近世陶磁器	
北小袋遺跡	散布地	縄文	—	—	

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 54 集

館林市内遺跡発掘調査報告書

ー平成 27・28 年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査ー

編集・発行　館林市教育委員会　文化振興課　文化財係（館林市文化会館内）
〒374-0018　群馬県館林市城町３番１号　電話 0276-74-4111
印　　刷　上毎印刷工業株式会社
発行年月日　平成 29 年３月 31 日

©Tatebayashi City Board of Education 2017 Printed in Japan